



a 1 3 8 0 3 2 1 7 5 6 a

福岡教育大学蔵書

日本立志編卷三目次

勤勉ノ部

入高遠ノ志アリト雖_レ氏勤勉スルニ非ズンバ事業ヲ成就ス可カラサルヲ叙ス_一丁

第一 粟田左大臣謹恪ヲ以テ嘉尚セラレシ事_三丁

第二 馬場信房松本桂林ヲ疎ミシ事_三丁

第三 稲葉一徹文雅ヲ以テ害ヲ免カレシ事_五丁

第四 佐野了伯平語ヲ演セシメタル事_六丁

第五 林羅山除日ヲ以テ講ヲ起セシ事_八丁

第六 山崎嘉右衛門三樂ヲ語リシ事_九丁

第七 伊藤仁齋赤貧ニシテ苦學セシ事_{十二}丁

第八 三宅重固獄ニ在テ書ヲ著セシ事_{十四}丁

日本立志編 卷三 目次

第九 貝原篤信老テ猶ホ怠ラサリシ事 十五丁

第十 原尚菴學ヲ嗜ム事 十七丁

第十一 澤維顯遊戯ヲ好マサリシ事 十八丁

第十二 井上嘉暲戸ヲ閉ヂテ書ヲ讀ミシ事 二十丁

第十三 伊藤莊洛古語ヲ壁ニ貼シテ自ラ警シメシ事 二十丁

事 二十丁

第十四 如々美光章線香ヲ焼テ書ヲ讀ミシ事 二十二丁

第十五 神屋彌左衛門文武ニ兼通セシ事 二十三丁

第十六 中西維寧恆ニ寢ニ就クニ無カリシ事 二十五丁

第十七 蘆野孝七郎幽囚セラレテ書ヲ著ハセシ事 二十七丁

事 二十七丁

第十八 石多仲磨子一冊ヲ廁中ノ壁ニ糊塗セシ事

第十九 新田靜志ヲ立テ忠誠ヲ以テ白ラ鼻ノシ事 二十九丁

二十九丁

第二十 細井徳民篤志力學ニ由テ徳望ヲ得タル事 三十丁

三十丁

第二十一 並川彌左衛門論語ヲ讀ムヲ聞キシ事 三十三丁

應舉心ヲ專ラニシテ繪事ニ刻苦ヒシ事 三十四丁

第二十二 森祖仙三年山ニ在リ其技ヲ以テ傳ヘシ事 三十六丁

熊代彦之進虎圖ノ前ニ在テ虎ノ畫キシ事 三十六丁

三十六丁

第二十五 池無名發憤苦學シシ事 三十八丁

皆川洪園讀書ニ謹勉セシ事 三十九丁

第二十六 皆川洪園讀書ニ謹勉セシ事 三十九丁

第廿七 頼子成勉強刻苦シテ其志ヲ達セシ事 甲丁

第廿八 古川某地理ヲ究メンガ爲メニ海内ヲ遍遊

セシ事 甲丁

第廿九 森守左衛門書ヲ手寫シ數十卷ニ至リシ事

甲丁

第三十 觀世次郎太夫僧父ヲ師トセシ事 甲丁

第卅一 寶生彌五郎指ヲ咋ムテ假面ニ血ヌリシ事

甲丁

第卅二 山田琳卿學業ヲ勤メ實踐ニ厚カリシ事 甲丁

日本立志編卷三

千河岸 貫一 撰述

勤勉ノ部

人高遠ノ志アリト雖_レ、勤勉スルニ非ズンバ、事業ヲ成就ス可カラザル_レヲ叙ス。

人恆ネニ儉素ヲ尚トビ、其志ヲ高遠ニシ、敢テ奢侈ノ風ニ厭セズ、小成ニ安シズルノ俗ニ泥マズト雖_レ、遊惰ニシテ其志ス所ノ事業ニ刻苦セズンバ、種ヲ良田ニ播シテ、而シテ耨ラザルニ同ジ、何ヲ以テ其事業ヲ成就スルヲ得ンヤ、且夫人心ハ、逢フ所ノ境ニ隨テ移動シ易ク、時ハ少ラクモ止ラス、一日一夜、二十四時アリト雖_レ、現在ノ時ハ僅カニ

一秋時ノミ。前ナル者ハ既ニ去テ復タ還ラズ。後チナル者ハ未タ來ラザレバ。預メ之ガ措置ヲ爲シ難シ。人生三萬六千ノ光陰。此現在ノ一秋時ヲ多ク積累セシモノニ外ナラス。然ルニ其腦裡ニ於テ。一タビ某事ヲ爲シ。某業ヲ成サントスルノ志ヲ興スアリトモ。或時ハ存在シ。或時ハ亡滅シ。有ルカ如ク無キカ如クナランニハ。決シテ其事業ヲ成就スベカラザルナリ。故ニ一タビ志ヲ立テ。某々ノ事業ヲ果タシ遂ゲント思惟セル。一秋時間ノ思想ヲ。永ク保續シ。以テ身ヲ終フルニ至ル。凡ハ所謂精神到處金石皆透ル。何事カ成ラザランヤ。然ルニ其初志ヲ保持シ。以テ久キニ及フニ就テハ。種々ノ障礙ヲ來タシ。其志ヲ遮斷セラル。無キ能ハス。其之ヲ遮斷セラル。ニ際シ。百折撓マス。千挫モ屈

ビ。銳進シテ止マリル所ノ勤勉力アルニ非ス。ハ決シテ其初志ヲ遂クルノ日ニ逢フ可カラザルナリ。彼松柏ノ鬱蒼トシテ天ニ參ハルヲ視ヨ。幾多ノ風雨霜雪ヲ經テ。其色ヲ改メス。其年ヲ經ルノ最モ久シキハ。天下ノ良材トナル。人有用ノオト呼ビ。有爲ノ士ト稱セラル。モ亦然リ。若シ其勤勉スルヲ僅カニ數月。若クハ期年ニシテ。人材タラントスルハ。猶ホ獨活ノ老^々大ナルカ如キ者ノミ。亦何ソ齒牙ニ措クニ足ランヤ。然レバ則チ洋ノ東西ニ論無ク。時ノ古今ヲ問ハズ。人生事業ノ成否ハ。勤勉ノ多寡如何ニ由レリ。然ルニ世人或ハ先賢古哲ヲ視。動モスレバ天資英敏ニシテ勉強ヲ待タズト爲ス。是賢哲ガ尋常ニ百倍スルノ力ヲ用キタル苦辛ヲシテ。水泡ニ歸セシムル者ト謂フベシ。

常人ハ勉強ニ間斷アリ。工夫ニ罅漏アリ。唯賢哲ハ間斷ナク罅漏ナク。精純不息ナルガ故ニ。能ク常人ノ到ル能ハザルノ地ニ達セルノミ。周文ノ靈々。孔子ノ敏求。周公ノ且ヲ待ツノ類。聖人ト雖正ミナ然ラサルハ無シ。朱子云。堯舜ヲ求テ取諸人。豈是信及行將去。某嘗看朋友好論聖賢等。叙看來却。不消如此說。如千里馬也。須使四脚行。駑駘也。是使四脚行。不成說。千里馬都不用動脚。使到千里。只是他行較快耳ト。此說真ニ然リ。然ルニ佚ヲ好ミ。勞ヲ厭フハ人ノ常情ナルヲ以テ。數其志ヲ激勵スルニ非レバ。怠惰ニ流レ易シ。左ニ列記スル所ノ如キハ。則チ古來有名ノ學士等カ勤勉倦マザリ。事蹟ニシテ。後進ノ士カ其心志ヲ激勵シ之ヲシテ。間斷無ク罅漏ナク。カクシムルノ鞭策タルハキセノナラン

ト云爾。

第一 粟田左大臣謹恪ヲ以テ嘉尚セラレシ事

藤原在衡朝臣ハ。中納言山陰ノ孫ナリ。伯父有賴養テ嗣ト爲ス。延喜十二年。文章生ト爲ル。安和。中累進シテ。從一位右大臣ニ至リ。尋テ左大臣ニ轉ズ。其職ニ在ル。未ダ嘗テ朝參ヲ廢セズ。一日風雨暴烈ナリ。衆相謂テ曰ク。勤恪在衡公ノ如キモ。亦朝參ニ艱ムト。言未ダ畢ラス。簞笠者至ルアリ。之ヲ視レバ。則チ公ナリ。時人歎稱ス。公豫テ帝ノ讀ム所ノ書ヲ知リ。朝ニ入ル。毎ニ車中必ズ其書ヲ載セ。顧問スル所アレハ。則チ應對明悉ナリ。是ヲ以テ才學ノ人ニ過グル無シト雖。比深ク嘉尚セラレ。其薨ズルニ及ビ。從一位ヲ贈リ。粟田ノ左大臣ト稱ス。

櫻所子曰。凡ソ士朝ニ在ルト野ニ在ルトニ論無ク。各自ノ勤ニ服シテ怠ラサルヲ以テ。修身ノ第一義トス。假令才學ノ人ニ過グルアリト雖也。苟モ其職務ニ怠ラバ。瑕疵トシテ指斥セラル。ヲ免ガレズ。宜ナル哉。公ガ才學人ニ過グルナシト雖也。其謹勉ノ人ニ過グルヲ以テ。深ク嘉尚セラレシ。今世才ヲ負ビ氣ヲ恃ンテ。各自ノ勤ニ服スルヲ厭フ者。假令才氣人ニ過グルアリト雖也。遂ニ世ノ輕淺スル所トナラン。

第二 馬場信房松本桂林ヲ疎ミシ事

松本桂林ハ書ヲ讀ミ善ク和漢ノ事蹟ヲ知ルヲ以テ。或時馬場美濃守信房諸葛孔明ノ人トナリヲ問フ。桂林即チ説テ曰ク孔明ハ躬カラ耕シ。劉備其材能アルヲ聞テニタビ

草廬ヲ顧ミシニ及ビ。然ニ三分割據ノ策ヲ書セリ云々ト

信房以為ク。桂林ハ學者ナリト。時ニ真田ノ家士。甘利同心須原宗左衛門ノ來リ訪フニ會ス。信房之ニ接スル頗ル鄭重ナリ。其歸リシ後チ。桂林恠ムテ謂テ曰ク。彼ノ輩ハ他ノ士卒ノ微俸ヲ享ルモノナリ。何ゾ其接遇ノ太々鄭重ナルヤト。信房此ヲ聞テ以為ク。我ハ劉備ガ材能アル農夫ヲモ二カビ。駕ヲ杜ゲテ聘セシト聞ケバ。人ノ材能ハ尊貴ナル者ナリ。彼甘利須原二士ノ如キハ。智畧アリ。勇武ハ名譽高キ者ナルヲ以テ。其材能ヲ敬シテ。感勲ニ接待セリ。然ルニ桂林ハ自カラ劉備孔明風雲際會ノ事ヲ説キツ。翻テ我ヲ尤ムルハ言行相撞着スルニ非ズヤ。然レバ則チ書ヲ讀ム。丁チ解セサルモ。其事實ニ体達スル者ヲコソ。真ノ學者

ト謂フベキナリト。

櫻所子曰ク世ノ講學ヲ事トスル輩徒ニ文字章句ノ末ヲ
攻メ或ハ博洽記誦ヲ貪ホリ歟トシテ議論ヲ逞ニスル
モ曾テ心上ニ向テ前賢古哲ノ言行如何ト推究セサル者
溜々トシテ皆是ナリ口ニ修身ヲ説キ經濟ヲ談シ權利ト
イヒ自由トイフモ心ニハ志操無ク檢束無キ何ゾ枕顔シ
テ學士論者ト稱スルヲ得ンヤ雨森芳洲謂ハルアリ曰
ク諸レヲ戲場ニ觀ル且ツ孝婦タリ且ツ義夫タリ觀者ヲ
シテ心ニ感シ淚ヲ揮ハシメサルハナシ稱讚已マス戲終
レバ則チ奮ニ仍テ庸夫俗子ナルノミ書ヲ講スル我輩ノ
如クモ皆一優人ノミト善哉言ヤ余ノ所謂學者ハ則チ梨
園弟子ノ忠臣節婦ヲ扮スルト一類ニシテ彌見ノ假聲ヲ

爲シ、蘆發ノ假面ヲ冒フテ入ヲ味セントスル者多カラズ

トセズ美濃守ノ爲メニ疎マレザル者ハ蓋シ鮮ナシ學ニ
志ス者意ヲ躬行心得ニ注カズンバアル可ラス。

第三 稻葉一徹文雅ヲ以テ害ヲ免カレシ事

稻葉伊豫守通朝後チ髮ヲ削テ一徹ト稱ス齋藤龍興ニ仕
フ龍興暗弱ニシテ暴政多シ將士多ク心ヲ織田氏ニ歸ス
通朝驟諫ムレ氏改メズ通朝其與モニ爲スアルニ足ラザ
ルヲ知リ終ニ去テ織田氏ニ屬ス而シテ信長意未ダ釋然
タル能ハズ乃チ茗讎ヲ設ク之ヲ茶室ニ延キ竊カニ其臣
三人ヲシテ伴接ニ托シ以テ之ヲ圖ラシム一徹從容トシ
テ茶室ニ入り壁間挂ル所ノ詩ヲ朗吟シテ曰ク雲橫秦嶺
家安在雪擁藍關馬不前ト三人就テ其義ヲ問フ一徹曰ク

是ハ唐ハ韓愈ガ潮州ニ謫セラルルハ時作ハル詩ナリ云々ト其事實ヲ分解スル甚ダ詳カナリ信長登ヲ隔テ傾聽シ忽然トシテ走り出デ一徹ニ謂テ曰ク我レ初メ卿ヲ以テ一武勇男子ト謂ヘルナリ今乃チ其支學アル此ノ如クナルヲ知リ猜疑ノ心頓ニ消ス何ゾ殘害スルニ忍ビンヤト乃チ告グルニ密謀ヲ以テス三人ニ命ジ各ヒ首ヲ懷ヨリ出サシメテ之ヲ示ス一徹頓首シテ謝シ袖裏亦刀ヲ出シ笑テ三人ニ謂テ曰ク今日ノ事僕モ亦我心無キニ非スト信長嗟賞之ニ久シ

櫻所子曰ク危哉一徹若シ不學無術ニシテ文字ヲ解セス古人ノ詩ヲ演說スル能ハズンバ馬ンゾ刀俎魚肉ノ間ニ在テ能ク從容トシテ以テ萬死ニ一生ヲ得ルアランヤ

夫レ人ハ其心ヲ娛マシムル一無キ能ハズ詩歌書画ヲ學ブカ如キハ心ヲ娛マシムルノ資料ニシテ但輕重本末ヲ失ハザレバ其益多シ況ヤ學術德行ノ身ヲ立テ家ヲ興スベキ者ニ於テヤ

第四 佐野了伯平語ヲ演セシメタル事

佐野了伯ハ佐野ノ城主佐野宗綱ノ弟ナリ髮ヲ削テ天徳寺ノ主ト為ル天正十三年宗綱没シテ嗣無シ了伯佐竹義宣ノ族ヲ以テ嗣ト爲サント欲ス其老大貫某竹澤某等肯ンセス北條氏政ノ弟氏忠ヲ迎ヘ立テ嗣ト爲ス了伯怒リ去テ京師ニ如キ黒谷ニ隱ル其驍名夙トニ著ルヲ以テ豊臣秀吉公北條氏ヲ征スルニ及ビ了伯ヲ召シテ卿導ト爲ス佐野氏ノ舊臣ヲ招降ス時ニ氏忠小田原ニ在リ留

守、將士皆了伯ニ應ズ。獨リ大貫氏從ハズ。乃チ攻メテ之ヲ殺ス。秀吉了伯ヲ以テ佐野ノ城主ト爲ス。了伯之ヲ辭シ、富田左近將監次子。政綱ヲ以テ宗綱ノ後子ト爲サンヲ請フ。之ヲ許ス。了伯入トナリ、智辯ニシテ、義ヲ重ンス。嘗テ琵琶法師ヲ招キ、平語ヲ演セシト、曰ク、我が爲メニ悲愴ノ曲ヲ奏セヨト。對テ曰ク、謀乃チ佐々木高綱宇治川ノ曲ヲ奏ス。了伯愴然トシテ涕下ル。奏シ闕テ又一曲ヲ請フ。那須宗高扇ノ的ノ曲ヲ奏ス。了伯愴然トシテ涕ヲ出シ、後子左右ニ語テ曰ク、前日ノ平語汝ガニ教テ如何。咸ナ對テ曰ク、絶ダ歎ナリ。獨リ恠ム。二曲皆勇氣奮發、人ノ胸懷ヲ快フス。而シテ君獨リ之ヲ悲ム。ハ何ゾヤト。了伯歎ジテ曰ク、吾今ニシテ後子汝ガ輩皆頼ムニ足ラザルヲ知ルナリ。夫レ高綱

騎ル所ノ馬ハ源右府之ヲ其親弟ト其寵臣トニ予ハ

テ、獨リ之ヲ高綱ニ賜フ。高綱右府ニ矢テ曰ク、臣竅ニ先ダツテ、宇治川ヲ騎渡セシム。復タ生還ヒスト、宗高ハ如キモ亦然リ。源判官熊襲ハ士固ヨリ乏シカラザルナリ。而シテ、宗高衆ニ技カレ、獨騎海中ニ向テ、兩軍皆戰ヒテ息メテ觀ル。是時ニ當リ、若シ射テ中タラスンハ、宗高必ス屠腹シテ死セン。二子ハ先ヅ死ヲ胸中ニ決ス。是ヲ以テ其情ヲ察ス。我レ安ゾ之ガ爲メニ悲マザルヲ得ンヤ。我戰ヒニ臨ム。當ニ一子ハ心ヲ以テ心ト爲ス。故ニ其曲ヲ聽テ其感ニ堪ヘサルナリ。汝等カ勇ハ唯血氣ニ任カス。其實ニ出ルニ非ズ。事ニ臨ンデ豈ニ恃ムニ足ランヤト。

櫻所子曰ク、志士ハ溝壑ニ在ルヲ忘レズ。勇士ハ其元ヲ喪

ヲヲ忘レズ。故ニ古代戰陣ニ於ケル事ヲ聞ク、亦悲愴ノ感
情ヲ喚起スルヲ致ス所以ナリ。所謂活眼ヲ以テ活書ヲ讀
ム者了伯ノ平語ヲ聽クガ如キヲ謂フナル可シ。思フニ古
來英雄豪傑ノ士、及び一技一藝ニ名アル者ハ、其志恆ニ存
シテ、精神ヲ盡ニ止メザル無シ。視ヨ郭泰ハ材ヲ求ムルノ
心在リ、故ニ茅容ガ雨ヲ避ルヲ見テ、其異常ノ器能アルヲ
知ル。越前少將、勇武ヲ以テ天下絶倫ト稱セラレントスル
ノ志、恆ニ存ス。故ニ舞妓ノ曲ヲ奏スルヲ觀ルモ、亦涕泣ス。
顏回ハ孝養ヲ思フ。故ニ飴ヲ見テ老ヲ養フベキ者トシ、盜
跖ハ、翻テ之ヲ戶樞ニ塗ルノ具ト爲スガ如シ。然レバ則チ
了伯ガ平語ヲ聽クハ、移シテ以テ史ヲ讀ミ、書ヲ解スルノ
法ト爲ス可キナラズ。學藝技術ニ志ス者ハ、渾テ其精

神ヲ恆ニ其學習スル所ニ存スレバ、遇フ所ノ境、渾テ其志

氣ヲ激勵シ、誘テ以テ妙境ニ趣向セシムルノ具タラサル
無キヲ知ルニ足ラン。夫レ此ノ如クナラバ、天地萬物、耳目
ニ觸ル、所ノ者、悉ク是我藥籠中ノ物タリ。若シ之ニ反シ
テ、酒色若クハ玩好ノ爲ニ、其志恆ネニ存スルヲ無クンバ、
口ニ中外古今ノ事蹟ヲ談シ、心ニ和漢歐米ノ賢哲ノ嘉言
善行ヲ讀ムズルモ、諺ニ所謂隣家ノ財産ヲ算フルカ如シ。
亦何ノ益カアランヤ。知ルベシ人ノ勇怯巧拙アリ、智愚賢
不肖アル所以ノ者。至竟勤勉ニシテ、恆ニ其志ヲ精神ニ存
セザル無キト、怠惰ニシテ時トシテハ、其志ヲ遺失スルコ
アルトニ由ル察セザル可ケンヤ。

第五 林羅山除日ヲ以テ講ヲ起セシ事

林信勝、羅山ト號ス。徳川氏創業ノ時ニ際シ、大ニ任用セラレ、儀則律令ヲ創定シ、幕府須ユル所ノ文書、其手ヲ經ザル者ナシ。初メ家康公ノ召ニ應ジ、四世ニ歷仕シ、即位改元、行幸入朝ノ禮、及び宗廟社稷祭祀ノ典、外國ノ事、與カリ議セザルナシトイフ。其博洽ナル。天下ノ書ニ於テ讀マザルナク、著スル所凡ソ百有餘部アリ。中ニ於テ水集百五十卷、詞エナラザルモ、其言微スルニ足ル者多シ。其暮年ニ及ンテ、視聽衰ヘズ、亦陰ヲ惜ニテ、勤勉スルヲ猶ホ必年ハ時ニ減ゼズ。少キヨリ二十一史ヲ讀ム數週ニシテ、晉書以下未タ句セズ。年七十四ニ及テ、遍ネク之ヲ句セント欲シ。晉書宋書、南齊書業ヲ畢リ、其翌年ニシテ没セリ。羅山嘗テ人ニ邀ハラレテ、欲國會ヲ觀ル。適一諸生崇陰比事ヲ袖ニシ來テ

聞フ羅山一々之ヲ誦ク、晷既ニ移リ、遂ニ會ヲ觀ス。又羅山

カ同門ノ人皆得菴、歲暮羅山ニ謂テ曰ク、余未ダ通鑑綱目ヲ讀マズ。先生明春ヲ以テ余ガ爲メニ之ヲ講セヨト。羅山曰ク、子ガ心誠ニ之ヲ求メバ、何ゾ來年ヲ待タント。即チ除日ヲ以テ講ヲ起ス。櫻所子曰ク、元ノ時代、三尺ノ劍ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ興ス者、數フルニ勝ユベカラズ。而シテ羅山道春、獨リ孔孟ノ道ヲ唱ヒ、遂ニ民部卿法印ト爲リ、衆輿城ニ入ルヲ聽スノ時、皆ヲ兼クルニ至ル。之ヲ我邦ノ叔孫通ト謂フモ可ナリ。其老ニ至テモ、勤勉倦ムヲ知ラズ。除日ヲ以テ講ヲ開キシガゴトキ、後進ノ士ガ矚情ヲ暨スルノ藥石ト爲スベキナリ。

第六 山崎嘉右衛門三樂ヲ語リシ事

山崎嘉右衛門、聞齋ハ其蹄ナリ。京都ノ人、木下侯ニ仕フ。聞齋始メ江戸ニ到ル。寒、寒ニシテ、儻石無シ。故ラニ書商ニ鄰ツテ、賃居シ。以テ其書ヲ借閱ス。是時ニ當リ、井上侯學ヲ好ミ、士ニ下ル。書商モ亦數謁見ス。一日侯商ニ謂テ曰ク、寡人マセニ學バントス。爾今ノ知ル所、人ノ師トスルニ足ル者アラバ、請フ爲メニ紹介セヨト曰ク。近ゴロ一儒生山崎嘉右衛門トイノ者アリ。京師ヨリ來テ小人ノ東家ニ住ス。其以テスル所ヲ視ルニ、尋常ニ度越ス。閣下ニシテ之ヲ召サハ、其不虞ノ幸福ヲ得ルナリ。豈ニ感奮ジテ恩ニ答フルヲ思ハザランヤト。侯大ニ喜ビ、乃チ延致セシム。商歸テ聞齋ニ告グ。聞齋毅然トシテ曰ク、侯道ヲ聞ハシトセバ、則チ先

ツ來リ見コト。商慨然トシテ以爲ク、抑大時勢ニ通ゼス。若

シ此ノゴトキ人ヲ薦メバ、必ズ上ヲ凌ギ法ヲ無クシ。累自カラ及バン。薦メザルニハ、若カズト。他日侯復タ問テ曰ク、曷昔告グル所ノ山崎生ハ如何ント。商曰ク、小人情ルニ非ルナリ。前日侯ニ命ヲ渠ニ傳フ。渠曰ク、侯先ヅ來テ余ヲ見ヨト。是頑愚ニ非レバ、即チ狂率名ヲ違ムルナリ。請フ別ニ通儒ヲ選ベト。侯咨嗟良久フシテ曰ク、方今師儒ト稱スル者多クハ道ヲ行フニ意口無シ。東奔西走。其技ノ售レ易キヲ欲ス。而シテ、孤之ヲ聞ク。禮來學ヲ聞ク。雅教ヲ聞カズ。山崎生能ク之ヲ守ル。此レ、乃チ真儒ナリト。即チ駕ヲ命ジテ、其居ニ訪ハ、其樂薦推貴ニ屈セザル。概ネ此類ナリ。聞齋學初メ專ラ濂洛ヲ祖トシ。晚ニ及テ吉川惟足ニ從ヒ神道

櫻所子曰ク。今ノ少年。動モスレハ輒チ曰フ。吾學ニ志スト。雖氏學資無ク。大都ニ赴テ研精スルニ由無シト。或ハ曰フ。良師無キニ非スト。雖氏書ヲ買フノ資無キヲ奈何センヤト。而シテ富貴榮達ヲ慕フ。飢渴ノ飲食ニ於ケルヨリモ甚シク。業未ダ熟セズ學未ダ成ラズシテ。早ク既ニ禄ヲ求ノ。微官薄俸ニ安ンズル者多カラズトセズ。之ヲ樹木ヲ未ダ長ゼザルニ伐リ。菓實ヲ未ダ熟セザルニ擷スルニ喩フ。豈惜シカラズヤ。視テ前於先輩ノ寒劣ニ生長シテ。名ヲ成シ家ヲ興スモノ多ク。富貴ニシテ學識富贍ナル人少キヲ。聞齊ノ如クハ。其貧窶隣ヲ書肆ノ傍ニトシ。其書ヲ借覽スレモ。屹然トシテ守ル所アリ。取テ權貴ノ人ニ屈セズ。卑賤

ニ生レテ富貴ニ生レザルヲ以テ樂ミノ最モ大ナル者ト

スルガ如キ。其志操ノ堅忍不拔ナルヲ見ルニ足レリ。而シテ其天性峭嚴ニシテ。師弟ノ間儼トシテ君臣ノ如ク。教ヘテ受クル者。貴卿巨子ト雖氏。之ヲ眼底ニ置カス。書ヲ講スル音吐鐘ノ如ク。面容怒ルガ如ク。聽衆凜然トシテ敢テ仰テ見ズ。門生毎ニ竊カニ相告ゲテ曰ク。吾儕未ダ幼稚ヲ得ズ。情欲ノ感時ニ動キ。自ラ制スル能ハス。則チ瞑目シテ先生ヲ一想スレバ。欲念頓ニ消シ。寒カラズシテ慄スト。以テ其素行ノ如何ヲ知ルニ足レリ。歐人ノ諺ニ曰ク。奴僕ノ目ニ英雄無シト。是英雄豪傑ト雖氏。平素ノ行爲ニ於テハ。自カラ其短所ノ掩フ可カラザルアルヲ謂フナリ。然ルニ日ニ其請惟ニ侍スルノ門生ニシテ猶ホ此ノ如シ。翁ノ養フ

所知ルベキナリ。然レ氏聞齋モ亦人ナリ。後進ノ君子之ヲ
勉メヨ。

第七 伊藤仁齋赤貧ニシテ苦學セシ事

伊藤仁齋ハ京都ノ人家素ト賈ヲ業トス。仁齋幼キニリ穎
異挺發。群兒ニ異ナリ。其始メ句讀ヲ習フ時。意已ニ儒ヲ以
テ一世ニ炫耀セント欲ス。稍長スルニ及ビ。堅苦自勵。勵ム
親戚以テ利ニ迂ナリト爲シ。皆ナ之ヲ沮ンテ曰ク。學問ハ
是レ彼邦ノ事ナリ。此邦ニ在テハ固ヨリ無用ニ屬ス。假令
之ヲ能クスルモ售レ易スカラズ。如カス醫術ヲ爲シ以テ
生涯ヲ致サンニハト仁齋從ハズ。而シテ家日ニ衰謝ス。沮
ム者愈止マズ。而シテ其志確乎トシテ變ゼズ。其遂ニ赤貧
ニ至ルヤ。歲暮糶糶ヲ買フ丁能ハズ。亦曠然トシテ以テ意

トトス。妻跪キ進ムテ曰ク。家道有鞠。妾亦女。當テ堪任。但
トス。而シテ獨リ其志ヲ成ルベカラザル者ハ。孺子原截未ダ貧
ハ何物。夕ハヲ解ヒス。人家資アルヲ羨ミ。連リニ求メテ已
マズ。妾口ヲ能ク之ヲ諷。阿スト雖。比勝爲メニ斷絶スト言
訖。テ泣下ル。仁齋乃ニ隱リ書ヲ闕ミシ。一言之カ答ヲ爲サ
ズ。直ニ其著スル所ハ外。糶ヲ脱シ。以テ妻ニ授ク。或時左
右比屋カヲ戮セテ義井ヲ濬フス。仁齋之ヲ聞キ出テ。共
ニセント欲ス。衆皆ナ曰ク。吾曹之ヲ成セバ足ル。何ゾ先
ヲ役スル丁ヲセント。仁齋曰ク。敢テ義ノ辱キテ謝ヒサ
ン。然リト。雖レ余此井ニ汲ム。既ニ衆ト異ナラス。今豈ニ
獨リ與カラザルノ理。アランヤト。遂ニ糶ヲ執テ其勞ヲ分
其食ニ居テ感マズ。學識高フシテ人ニ驕ラザル丁此

如シ。肥後侯、祿千石ヲ以テ之ヲ招ク。辭スルニ母老テ侍養
入無キヲ以テス。利祿ノ爲ノニ其心ヲ動カサ、ル。亦此ノ
如シ。而シテ年六十二垂ントスルマテ家猶ホ寒シ。其生徒
ヲ教授スルコト四十餘年。天下ノ學者四方ヨリ來テ之ニ
歸ス。國トシテ至ラザルナシ。唯飛騨佐渡壹岐三州ノ人ノ
門ニ及バザルノミ。謁ヲ執ルノ士千ヲ以テ數フ。實ニ一代
ノ儒宗ト稱スベシ。

樓所子曰ク。仁齋ハ市井ノ間ニ生長シ。其幼齡句讀ヲ受ク
ルノ日。早ク已ニ一代ノ儒宗タラントスルノ志ヲ抱キ。之
ヲ持スルノ堅確ナル。親戚之ノ沮メドモ撓マズ。赤貧骨ニ
微ムレモ戚マス。千石ノ俸祿ヲ以テスルモ動カズ。春毒ノ
所謂仁齋、最、謙、ノ、士、ナリ、所謂、文、王、ヲ、侍、タ、ス、シ、テ、作、ル、

ハ、ナ、リ、ト、ハ、謙、言、ニ、非、ル、ナリ、也、或、ハ、其、家、政、ニ、過、ル、ト、花

街ヲ過ル花街ナルヲ覺ラリシ事トヲ以テ。世事ニ達
ヒリハヲ嗤ル者アリト雖。是亦大小輕重ヲ知ラザル
者ノ言ノミ。遂々トシテ日ニ錙銖ノ利ヲ爭ヒ。若クハ大都
花柳ノ地ヲ詣ンズルモ。身ヲ修メ家ヲ齊フルヲ知ラズ
ンバ。是其重且大ナル者ヲ棄テ。小且輕ナル者ヲ取ル者
ノミ。何況ヤ仁齋ノ如キ。學師傳一由ラズシテ。徳川氏以來
ノ儒學ノ嚆矢タリ。躬行恭謙ニシテ。立春ノ夕々必ズ禮服
ヲ着ケテ炒豆ヲ撒ビシガ如キ。其地ヲ過ギ其主ヲ禮セズ
シテ可ナランヤトテ。梵刹ヲ過ギ佛像ヲ見レバ。即チ拜セ
シガ如キ。細環ノ事ト雖。亦敢テ輕忽ニヒズ。其篤實温厚。
中江藤樹ヲ除クノ外。亦見ザル所ニシテ。學者修身ノ模範

トス、キ碩儒ナルヲヤ。

第八 三宅重固獄ニ在テ書ヲ著セシ事

三宅重固ハ尚齋ト號ス。播磨ノ人ナリ。年十九ニシテ山崎
闇齋ノ門ニ入り、專ラ儒學ヲ攻ム。後チ江戸ニ遊ビ、辟ニ阿
部侯ニ應ス。元禄中、將軍綱吉公侯ノ邸ニ臨ス。重固ニ命シ
テ論語ヲ講セシム。乃チ衣服ノ賜アリ。其官ニ在ル忠直務
シ、其誠ヲ盡クス。居ルコト十年。言行ハレサルヲ以テ疾ニ
移シテ致仕ヲ乞フ。允サレズ。猶小數乞フテ止マズ。是ヲ以
テ罷フ得。武藏國忍ニ幽囚セラレタリ。重固其囹圄ニ在ル
ヤ、免難窮迫ノ際、之ニ處テ、裕如タリ。乃チ謂ハ古人刑セラ
レテ尚小數乞書ヲ著ハク、吾寧ゾ爲スト無クシテ斃ル
ヲ待タシヤト。然レ氏筆墨得ハレラス。囚テ臂ヲ刺シテ痕

三宅重固ノ血書ス。侯人ヲシテ重固ヲ察ヒシム。重固即チ

詩ヲ作テ之ニ示ス。其詩ニ曰ク。

富貴膏矢不ニ心。但向面前養誠心。四十餘年學何事。笑坐
獄中鐵石心。

其氣象豪爽ナル此ノ如シ。獄ニ在ルコト三年。赦ニ會フテ放
タル。是ニ於テ去テ京師ニ之キ。儒ヲ以テ業ト爲シ。培根達
丈ノ兩學舎ヲ、勘解由坊ニ建テ、業ヲ講ス。播磨公侯從游
スル者甚ダ多カリシト云フ。

櫻所子曰ク。尚齋ノ獄ニ在ル。吾寧ゾ爲スト無クシテ斃ル
ルヲ待タンヤト。血ヲ刺シテ書ヲ著スルニ至リシモノ。以
テ其平生ノ志氣如何ヲ視ルニ足レリ。怠惰安逸ヲ貪ルモ
ハ。猶リ明時ノ廢物ノミナラズ。亦尚齋ノ罪人ナリ。

第九 貝原篤信老テ猶ホ怠ラザリシ事

貝原篤信益軒ト號ス。筑前ノ人。國主黒田侯ニ仕テ。寛永七年ヲ以テ福岡城中ノ官舎ニ生ル。篤信幼ヨリ警敏ニシテ殊質アリ。中年ニ及ビ。京師ニ入テ講學ス。都下ヲ名彦胥ナ心ヲ傾ケテ之ニ下ダル。博學洽聞ヲ以テ名海内ニ重シ。篤信好ムテ書ヲ著ス。而シテ世ヲ救フノ心實ニ答コロニシテ其著スル所百有餘種多ク書スルニ國字ヲ以テシ。語極ハテ懇切ナリ。田畯紅女童兒隸卒皆ヲ之ヲ便トス。又攝生ニ善シ。老ニ至テ猶ホ翼錄トシテ衰ヘズ。其屬綴スル所モノ少ナカラズ。六十ニシテ和漢名數増補ヲ作り。六十七ニシテ大和廻リヲ作り。七十四ニシテ筑前續風土記。及ビ照例ヲ作り。七十五ニシテ諸業辨人作り。七十九ニシテ大

和本判ヲ作クリ。八十一ニシテ樂訓ヲ作クリ。八十四ニシテ養生訓ヲ作クル。其著スルトコロノ慎思錄ニ謂ヘルコトアリ曰ク。魏志ニ曰ク。胡昭怡マトシテ愛セザル無シ。僕隸ト雖ドモ必ズ禮ヲ加フ。年八十二ニシテ書籍ニ倦マサル者。胡徽君ニ於テ之ヲ見ルト。篤信謂ラク。胡昭愛敬ノ德量及ブ可カラズ。以テ法ト爲ス可シ。八十書ヲ讀ムテ倦マサルガ如キハ。吾耆耄ナリト雖ドモ。亦夕日夕手卷ヲ釋カズ。是レ企及ス可シト爲スト。此レ篤信自ラ其實ヲ紀スルナリ。篤信ノ人ナル謙恭純篤ナリ。其言ニ曰ク。吾幸ニ朱子ノ後ニ生レテ。其書ヲ窺フコトヲ得無窮。幸又閑極ノ恩ト謂フ可キナリ。故ニ吾其之ヲ敬スル神明ノ如ク。之ヲ信スル蒼龜ノ如シト蓋シ其學。初メ陸象山王陽明ノ説ニ取リ。

後チ朱熹ノ學ニ歸依セシヲ以テナリ。篤信年八十五ニシテ没ス。

櫻所子曰ク、近世ノ人、四十五十二至レバ、輒チ自ラ老ヲ稱シテ百事爲ス能ハザルモノ、如クシ、勉強耐忍ノ氣象無ク徒ニ給養ヲ兒孫ニ託シ、安逸以テ死ヲ待ツノミ。夫レ人生ハ僅カニ三萬六千日、而シテ年七十二至ルヲ得ル者、古來稀ナリトセバ、年弱冠ヲ過ギザル際ハ幼少ナリトシ、四十ヲ踰エレハ老衰ナリトシ、其事業ヲ成就スルノ日月、數千日ニ止マル者トスルカ、吁、何ゾ自ラ任スルノ志ニ乏シキヤ、不幸ニシテ疾病事故アルニ際セバ、一事一業ヲ成サズシテ、州郡ト共ニ枯朽ヒンノミ。聞ク歐洲ノ人、年六七十ナハ者、數人相會スルアリ、且、語次一モ身體衰弱ノ事ニ反

テ無シト。我邦人ノ老者相逢フテ、晤語スレバ、必ず死ヲ待ツノ用意ヲ説クト、全ク反對セリ。是素ヨリ平素攝生ニ意ヲ注カザルヨリ、服各ク齒豁ク、身曲カリ脚重キニ至リ易ク、醫學タル者火キニ由ルナル可シト雖、氏抑モ亦其習俗ノ然ラシムル所、老テ猶ホ勉ム可キ者ト爲ササルニ由レリ。篤信其人ノ如キ、博學洽聞、海内無比ト稱セラレ、モ、自ラ足レリトセズ、年八十二至テ、手恆ニ卷ヲ繹カザリシハ、歐洲ノ博士學匠ニモ羞ダザル可シ。且ツ其朱子ニ於テ、無窮ノ幸固極ノ恩アリトシ、之ヲ敬スル神明ノ如シト云フ者、今ノ書生ノ、其學未ダ熟セズシテ、敬ク人ノ短ヲ拾ヒ、以テ口實ト爲シ、先覺者ヲ是非シテ、嘲々スル者ニ比スレバ、月鬻膏壤、啻ナラザルナリ。

第十 原尚菴學ヲ嗜ム事

原尚菴ハ京都ノ人ナリ。享保三年ニ生マレ。年五十二シテ没ス。儒ニシテ鑿ヲ兼テ清國ノ語ニ通ズ。ヲ以テ土井侯ニ任テ。尚菴幼ニシテ雋異。十歳ニシテ章句ヲ伊藤東涯ニ受ク。漸長シテ。學ヲ嗜ム。下。飢渴ノ如シ。口誦手録。晝夜廢セズ。父母内子之ヲ奇トシテ。其或ハ疾ヲ得ルヲ過慮ス。謂テ曰ク。惟ヲ下シ。憤リヲ發スルハ。成人ノ事ナリ。兒今童年。惟學ヲ斷。幾クシテ可ナリト。尚菴曰ク。發起シテ文字ヲ尋思ス。心下。暴爽ナルヲ覺フ。稍覺ルハ。則チ頭岑々トシテ。心裏。其長ズルニ及ビ。博學能文家資亦頗

シ。深キ者ト謂フ可シ。諺ニ言フ。之ヲ嗜ム者ハ。之ヲ爲スノ巧。由ルモノナルベシト雖也。抑モ亦々學ニ苦ムデ。未ダ學ヲ嗜ムニアラザルヲ以テノリ。尚菴ノ如キハ。學ヲ嗜ムノ深キ者ト謂フ可シ。諺ニ言フ。之ヲ嗜ム者ハ。之ヲ爲スノ巧。歟ナル者ナリト。尚菴ニ於テ我モ亦言フ。

第十一 澤維顯遊戲ヲ好マサリシ事

澤維顯。琴所ト號ス。近江ノ人ナリ。井伊侯ノ世臣タルヲ以テ。琴所亦歳十四ニシテ。祿三百石ヲ襲テ。近侍ト爲ル。侯ニ從テ。江戸ニ在ル三年。元禄中。疾ニ由テ致仕シ。京都ニ遊學シ。門ヲ杜テ。客ヲ謝シ。書ヲ讀ミ。力學スル。七八年中。年ニ及ビ。松雨亭ヲ彦根城ノ南。松寺村ニト築シ。徒ヲ聚メ。書ヲ講ス。門人。棲遲スト。雖也。從遊ノ盛ナル。未ダ曾テアラザ

ハ所ナリ。農夫、奴婢ニ至ルマデ、皆琴所アルヲ知ラザル者
無カリシト云フ。初メ琴所ノ江戸邸ニ在ルヤ、衆ニ異ナル
所アリ。凡ソ藩國ノ士大夫、江戸ニ祿役シ、邸ニ寓スル者、大
抵周歲ニシテ交代ス。其未ダ代期ヲ得ザレバ、公署ニ朝夕
シ、職掌ニ従事ス。出入限リアリ、勞ヲ極メカチ窮メ、以テ一
日ニ過ク土ヲ懷フノ情、親ヲ思フノ心、念マヒマス。以テ代
期ヲ俟ツ。故ニ其公ヨリ退テ舍ニ在ルヤ、或ハ茶ヲ品シ味
ヲ愛シ、或ハ局ヲ引テ勝ヲ争ヒ、或ハ器ヲ玩ビ物ヲ弄シ、百
ノ遊戯未ダ以テ日ヲ消シ、悶ヲ遣レニ足ラバ、乃チ朋類ヲ
延テ、醉飽歌呼シ、諠浪笑敖シ、放歌起謀シ、喧嘩紛擾シ、四隣
ヲ駭驚ス。往々是ニ由テ譴責ヲ受シ、罪ヲ受ル者アリ。蓋シ
百邸一轍、他事ナシ、無ニ琴所能カキ、習者ナシ、既ニ此

ニ見ルアリ。公退ノ後、夕ハ讀書是レ勉ム。講習ノ間、朋類來
テ勸ハルニ、遊戯ヲ以テスレバ、辭スルニ難ク好ムヲ以テ
ス。白晝ト雖、枕ヲ高フシテ寢ニ就ク。其志ヲ學業ニ專ラ
ニセシト、此ノ如クナリシト云フ。

櫻所子曰ク、琴所ガ睡ヲ好ムヲ以テ朋類ヲ謝絶セシト。井
上蘭臺ガ不在ヲ以テ客ヲ謝ストハ、昔時學者ノ分陰ヲ惜
テ、日夜孜々トシテ學習セシヲ見ルニ足レリ。夫レ人公ニ
奉スルト私ヲ營ムトニ論無ク、皆各自ノ職務アリ。本務ノ
餘暇ヲ以テ書ヲ讀ミ、學ヲ究メントスレバ、人ト談笑シ、飲
酒博局ヲ事トスルヲ得ズ。今ヤ公ニ私ニ各自ノ職務ニ從
事シ、各自ノ營業ニ朝夕シ、出入限リアリ、勞ヲ極メカチ窮
ムル者、太ダ多シ。而シテ其家ニ歸ルヤ、乃チ朋類ヲ延キ、醉

飽歌呼シ、謹浪笑敖スルノミナラズ、袂ヲ連ネテ花街ニ散
歩シ、車ヲ列ネテ柳巷ニ道違シ、殆ンド虚日無キニ至ル者
アリ、其甚シキハ青年ノ書生ニシテ、猶小其弊ニ倣フモノ
アルニ至ル、之ヲ昔時ノ士人ガ、東邸ニ駐在スルノ景狀ニ
比スレバ、更ニ甚シキヲ加フト云フモ、太過無カルベシ、其
家ニ歸テ勤勉書ヲ讀ミ、琴所其人ノ故智ヲ襲フ者無シ、益
シ之レアラシ、吾未ダ之ヲ見ザルナリ、宜ハル哉、圭運旺盛
ト稱スト雖、氏、學ニ邃キ人ノ寥々タル、晨星ノ如クニシテ、
品行方正ノ君子、亦マサニ地ヲ掃ハントスルコト、後進ノ上
幸ニ其志ヲ堅確ニシテ、遊戲ニ耽ケリ酒色ニ溺ル、ノ習
弊ニ薰染セララル、コト勿レ。

第十二 井上嘉膳戸ヲ閉テ書ヲ讀ミシ事

嘉膳名ハ照蘭臺ト號ス、江戸ノ人、幼キヨリ學好ミ、獨冠
ニシテ天野曾原ニ從ヒ、既ニシテ林鳳岡ノ門ニ入ル、元文
五年、辟ニ備前侯ニ應ジ、教授ノ職ニ任ズ、蘭臺戸ヲ閉テ書
ヲ讀ム、客ノ至ル、ハ、ハ、則チ自ラ答フル、不在ヲ以テス、
客以テ戲レト為ス、蘭臺聲ヲ勵マシテ曰ク、主人自ラ答フ
ルコト此ノ如シ、何ノ偽リカ、之レアラント、書ヲ讀ムテ、
ズ。

櫻所子曰ク、蘭臺ガ村正舒ニ答フル書ニ、照幼ニシテ孤貧
師保ノ訓無シ、然リト雖、凡詩ヲ誦シテ雅頌アルヲ知リ、書
ヲ讀ムテ、堯舜アルヲ知ル、然ル後チ困學二十年、日ノ如
シト云ヲ以テ見レバ、苦學勉勵セル思フ可キナリ、而シテ
學業成熟ノ後チト雖、凡戸ヲ閉テ、求客ヲ謝スルニ不在

ヲ以テス、其聲ヲ勵シテ自ラ答フル者、間話ヲ爲シテ貴重
ノ光陰ヲ消費センコトヲ懼ル、ノ切ナルヲ見ルニ足レリ。
而シテ其主人自答ス、何ノ偽リカ之レアラント云フモノ、
亦敢テ構思以テ人ヲ欺クコトヲ爲サズ、其易直ノ性質ヲ
想像スルニ堪タリ。世ノ名ヲ交際ニ托シ、飲酒博局ヲ事ト
シテ、分寸以テ黄金ニ値タヒスベキ光陰ヲ徒消スルヲ愛
マズ、而シテ勤モスレバ不在ト稱シテ、巧ミニ來客ヲ謝ス
ルガ如キ、爲ス所全ク蘭臺ト反對シテ、其怠惰ト不信トヲ
表スルニ足ルモノ、也。

第十三 伊藤莊治古語ヲ壁ニ貼シテ自ラ警メシ事
伊藤莊治ハ、錦里ト號ス。播磨赤石ノ人ナリ、其祖坦庵、其父
龍洲、共ニ儒者以テ稱アリ。錦里家庭ニ學ビ、經藝以テ益

トニ都門ニ著聞ス。蓋シ其父祖ヨリ三世、其表相繼ギ、後進
ニ領袖タルヲ以テ、之ヲ奉崇スル者尤モ衆ホシ。錦里資性
慎重ニシテ、名ヲ好マズ、謁ヲ請フ者アリト雖、其執ル
者、ニ非レバ、概シテ之ヲ謝絶ス、以謂ラク博交泛遊人皆其
名ヲ好ムガ爲ナリト。其越前侯ニ仕ラル。殆ンド四十餘年、
數江戸若クハ福井ニ祇役スト雖、氏奉職惟レ謹ミ、外交ヲ
爲サズ、其休暇シテ京都ニ在リ、經義ヲ講説シテ徒ニ授ク
ルニ當テ、足闕ヲ履マズ、習俗應酬ノ詩文ヲ爲クラズ、而カ
レ、氏其名ハ遠ク、時輩ハ駭雅博交ヲ以テ、藝苑ニ鳴ル者ハ、
右ニ出タリト云フ。錦里居ル所ノ室、壁上ニ志士不忘在溝
壑ハ、孟子ノ語ヲ書キ、以テ自ラ警ム。常ニ子弟ニ訓ヘテ曰
ク、士タル者ハ、此ヲ念ハガル可カラズト、

櫻所子曰ク善イ哉錦里ノ没交ヲ謝絶シテ且ツ常ニ自ラ
 警ムルヤ馬場美濃守ガ戰場常存ノ四字ヲ書シテ壁頭ニ
 掲ゲ平生自ラ警メシハ則チ勇士ハ其元ベヨ喪フコトヲ忘
 レサルナリ本庄因幡守ノ封侯ヲ得テ後子青錢五十文ヲ
 緡ニ貫キテ柱上ニ懸ケ三本入ノ扇子箱之事ノ九字ヲ書
 シテ壁ニ貼セシハ貴ニ居テ賤ヲ忘レザル爲メニ設ケシ
 ナリ本庄因幡守家俊ハ登庸セラレテ侍從ニ任ジ並間
 家俊恭儉ニシテ慎重ナリ恒ニ朝餐ノ後子其夫入ヲシテ
 茶三碗ヲ供セシメ且ツ裁メテ曰ク今日富貴ナリト難氏
 必ズ曩時寒微ナリシ時ヲ遺忘スベカラズ其居ル所ノ
 室錢五十文ヲ緡ニ貫イテ柱上ニ懸ケ又三本入ノ扇子箱
 之事ト書キタル紙ヲ壁上ニ貼付セリ親友或時其故ヲ問
 フ家俊答ヘテ曰ク我處ニタリシ時關東ニ來ルベシト
 救命アリシヲ以テ三本入ノ扇子箱ヲ二條家ノ家七ノ宅
 ニ齎ラシテ謝儀トシテ欲シ御影堂ニ至リ扇ヲ買ハシ
 買ハシメ囊中僅クハ一匁ノ銀アリト云云此錢一匁ニ買

ハ扇ハ價ヲ論セズ好ム所ニ隨テ多ク取ラルモ亦妨ケ
 ナシト云ス此時我ハ關東ノ威光斯クノ如クナル者カト
 思ヒシガ今ハ富貴ニシテ錢ト云ハ扇トイフ者如何ヲ
 知ラザルニ至リ本ヲ忘レテ君恩ニ背キ自家ノ驕奢ニ
 流ルハアランヲ懼ル故ニ曩日ノ事ヲ記念シテ忘レザ
 ルガ爲メニアランニ柱頭壁上ニ懸ケ且ツ緡ニ貫キテ
 以テナリト語ラ世ノ志士タル者恒ラ清儉ニ在ルヲ忘
 レシト云フ
 下ヲ懼レ空聲虚譽泛利淨榮ニ奔競スル下ヲ爲サズンバ
 以テ其志ヲ挫ギ其節操ヲ撓ハメテ廉耻ノ何事タルヲ顧
 ミズ人ニ向テ憐ミヲ乞ヒ旁肩諂笑スルノ醜態ヲ現ハス
 下無キヲ庶幾ス可シ然リ而シテ豪傑ノ士ト雖氏逢フ所
 ノ境ニ隨テ或ハ其心志ノ變移スル無キ能ハズ故ニ錦里
 ノ爲ス所ノ如キハ頗ル初志ヲ保續シテ龜勉斯ニ從事ス
 ルタメノ良策ニシテ馬場本庄ニ氏ノ爲ス所ト暗合セル
 亦奇ナラズヤ

第十四

加々美光章ハ、櫻搗ト號ス。甲斐國山梨郡ノ祠官タリ。幼ヨリ學ヲ好ミ、國典ハ言フヲ待タズ。儒經釋典、天文曆數、算術等、通曉セザルハ無シ。國風ハ風竹亭ノ翁ヲ師トシ、文學ハ三宅尚齋ヲ師トス。初メ、家貧ニシテ、油ヲ焚クハ、資無シ之ヲ以テ、線香ヲ燒キ、其光リヲ假テ書ヲ讀ム。業成ルニ及テ、名聲四方ニ聞エ、其門ニ遊ブ者甚ダ多シ。光章天性勤勉ナリ。既ニ此ノゴトヲ、加フルニ、氣質温厚ニシテ、行ヒ篤敬ナルヲ以テ、一言ヲ交ユルモノト雖、且歸服景仰セザルハ無カリシト云フ。

櫻所子曰ク、光章ノ學業ニ、龍勉セル、車胤孫康ニ比スルモ、亦敢テ漸色無シ。高堂ノ銀燭、明カニシテ書ヲ如ク、唯笙歌

ヲ照シテ書ヲ照ラリズ。或ハ雪ヲ積ミ、螢ヲ聚メ、或ハ線香ヲ焚キ以テ書ヲ照ス。其勞逸苦樂、相去ル一遠シ。然リト雖、其結果ニ就テ對較セバ、高樓置酒シテ、銀燭舞裙ヲ照スノ逸樂ヲ事トスル者、或ハ破産喪家ニ至リ、芸窓ノ下書ヲ讀ムデ、僅カニ凍餓ヲ免カル、ノ勞苦ヲ憚ラザル者。他年或ハ高蓋四輪、大達ニ來往スルノ富榮ヲ取ル。古人言ハル「アリ、曰ク、難キヲ先キニシテ得ル、後チニスト。世ノ得ルヲ欲シテ難キヲ辭セントスル者、省思セズンバ、アルベカラズ。

第十五

神屋彌左衛門文武ニ兼通セシ事

神屋彌左衛門、毅齋ト號ス。筑前福岡侯ノ世臣ナリ。著エタル所、歸鞍吟州ニ卷アリ。其記スル所ニ據テ視レバ、同僚ノ士

病ニ東邸ニ卧シ候駕ニ從テ歸ルヲ得ズ。侯毅齋ヲシテ者
護セシム。他日其病痊ヘ相伴テ西海ニ歸ル時ノ紀行ナリ
歸程鎌倉江ノ島等沿途ノ勝概ヲ遊觀シ之ヲ詩ニシ之ヲ
文ニス其懷古弔舊スル所史傳ニ族リ議論ヲ加フ其人ノ
文ニシテ武ナル儒ニシテ釋ニ通ズルノ一斑ヲ知ルニ足
レリ即チ卷初ニ四分律（釋典ノ名）勝病ノ五功德ヲ舉
ゲ枕經經八福田中看病ヲ第一トスル丁ヲ述フルカ如キ
是ナリ而シテ其詩其文亦卓然トシテ一家ヲナセリ卷首
享保戊戌夏宅觀瀾ノ序同庚子夏四月物祖練ノ序正徳乙
未歲釋大湖ノ序アリ觀瀾曰ク其覽ノ富識ノ偉辯ノ雄ニ
シテ支ノ宏且ツ暢ナル固ヨリ優然トシテ以テ通邑大都
ニ坐シ絳帳ヲ褰ゲテ青衿ヲ導ク者ト相周旋下上スルニ
足ル宜ク一郷ノ士ヲ以テ之ヲ視ルベキニ非ズト又曰ク

雲天千里首ヲ翹ケ悠々トシテ徒ニ其名ヲ仰テ親ク其誨
ヲ受クルヲ得ス是恨ヒトスベキナリト徂徠曰ク蓋シ其
人文武自ラ負ヒ經生ヲ以テ自ラ見ズ百氏ニ馳騁シ千古
ヲ凌厲シ玄ヲ出デ釋ニ入り奇正雲湧ス其才洵ニ測ル可
カラズト又曰ク然レモ此レ彼レニ往クヲ得ルナシ彼レ
來ル能ハス各天ニ斲繫ス徒ニ其眉宇ヲ此編ニ想フ恨々
タラザル可ケハヤト大潮ノ序ニ曰ク其言ヲ觀其安シス
ル所ヲ察スレバ蓋シ神氏ハ宋ノ蘇長公ノ流亞歟既ニ武
亦儒亦釋其學ニ非ルハ無シ吾之ヲ吟州ニ知ルト序者三
人皆當時ノ英俊ニシテ各推獎ヲ極ムル丁此ノ如クナル
亦以テ毅齋カ傑出ノ人タル丁ヲ知ルニ足レリ而シテ卷

目録
卷一
卷二
卷三
卷四
卷五
卷六
卷七
卷八
卷九
卷十

中自ラ幼年ヨリ研學セシヲ叙ス亦以テ其刻苦勉勵終
 二 遺諸スル所アルヲ見ルベキヲ以テ煩ヲ憚カラズ左ニ
 抽出スベシ即チ吟州上ニ曰ク憶フ予年十五六家貧
 シテ書ヲ嗜ム偶一書ヲ得ハ則チ拜戴シテ珍寶ヲ獲ル
 カ如クシ被読寢食ヲ忘ル既ニシテ微官ニ奔走シ夔東都
 二 迄ル書肆某ト歎密ナリ暇アレハ則チ書肆ニ入り閣上
 二 坐ス四壁細帙磊落棟ニ充ツ意ニ隨テ抽出シ仰テ讀
 俯シテ思フ稍飢ニレハ懷中ノ持飯ヲ取テ之ヲ喫ス其樂
 食前方丈侍妾數百人ト雖比易エサルナリ歸ルニ臨
 必ズ書一套ヲ借リ携ヘ歸ル晝間塵冗率ネ卷ヲ終フル能
 ハズ夜ニ入テ展讀且ニ達シ尚ホ手ヲ釋クニ忍ビス云々

龍騰鳳翔名ヲ後世ニ垂ルアリ其名ノ高キ其實ニ過ク
 ルアリ學問文章志氣節操兼キ備アリ其名ノ淫威シテ聞
 エルコト無キアリ船光隱德ノ士巖穴ニ老死シ世ヲ畢フ
 ルマテ人ノ之ヲ知ルヲキ和漢典例多ク寶鐘章柳キ
 レテ瓦釜雷鳴スルハ古今社會ノ通患ナリ刻苦力率退隱
 一 潛居シ坎軻身ヲ毀ス親戚ノ如キ其人ナリ然リト雖在
 二 卷ノ吟州彩華ヲ煥發シ三人ノ知己ヲ得テ榮光益灼カ
 ナリ毅齋カ中素勤劬ノ効亦夕空シカラスト謂フハ光
 第十六 中野維寧恒ニ寢ニ就ク日無カリシ事
 維寧通稱ハ曾七郎參河ノ人ナリ海峽竹腰氏ニ仕フ維寧
 弱冠ニシテ學ニ志シ暗室ニ坐スルヲ好ム白晝ト雖トモ

戸ヲ閉ク僅カニ容光ニ照シテ書ヲ讀ム夜ハ燈檠ニ對シ
毎ニ鶉鳴ニ至ルマデ几ニ隱テ坐睡ス以テ平生ト爲シ竟
ニ歳ニ就クコト無シ歳三十三至ル弟子日ニ進ミ門ニ遊ブ
者數十百人幾クモ無クシテ名護屋ニ移ル寛延中其主竹
腰氏ニ從ヒ江戸ニ越ク竹腰氏ノ邸ハ赤阪門外ニ在リ
寧即ノ官舎ニ寓ス來テ業ヲ請フヒノ兼トシテ已マズ
遂ニ命シテ邸ヲ出テ都下ニ寓居セシセ博ク四方ノ士
ニ教授スルタソノ費銀ヲ賜與セラル是ニ於テ講堂ヲ芝
三島坊ニト築シ費柱舎ト云フ竹腰氏ノ事ハ則チ吏ヲ
シテ之ニ就テ書問キ其論取テ事ニ非レバ敢テ召サズ
召セハ必ズ其ヲ以テ人ニ思過人ト傳ヘ而シテ四方ノ士氣
ヲ激シ輻湊シ其學業日ニ進ミ其學教傳ハ然レテ人ノ材ハ不

交遊極ノノ寡ク盛名有リト雖モ行ヒ本ニ由ラサル者ハ
辭シテ之ヲ見ルノシ故ニ名節ヲ以テ人ヲ勵ケマス其涵
濡ノ化自然ニ門人ニ及ビ其才ヲ育シ徳ヲ養フ即チ博綜
練達寫東刻ノ如キ雅量淹通飛走測ノ如キ捷敏應節河天
門ノ如キ篤學謹行紀平洲ノ如キ信恆直諫伊東冠峯ノ如
キ皆ナ得易スカラサル所ニシテ世儒ノ偏ニ文藝ノミヲ
以テ後進ヲ歎動スル者ト適カニ異ナリ雖寧病篤キニ至
リ弟子ヲシテ之ヲ扶起セシム几ニ隱テ尚ホ講ヲ輟メス
將サニ起サラント入ルヲ知リ筆スル所ノ著數本ヲ舉ケ
テ悉ク之ヲ燒カシム弟子皆之ヲ惜ム乃チ曰ク未定ノ書
ナリ恐クハ後世ヲ誤ラシト僅ニ文集十三卷ヲ以テ之ヲ
紀平洲ニ屬シ遂ニ寶曆二年七月ヲ以テ芝三島坊ノ寓ニ

紀平洲ニ屬シ遂ニ寶曆二年七月ヲ以テ芝三島坊ノ寓ニ

及、歲四十四、侯于多、ト、後、ヲ、服、スト、云、フ、

嬰、折、子、曰、ク、維、寧、ノ、學、ニ、志、シ、凡、ニ、隱、テ、坐、睡、シ、テ、寢、ニ、就、カ
ザ、リ、シ、ヨ、リ、其、病、篤、キ、ニ、及、ビ、尚、ホ、凡、ニ、隱、テ、講、ニ、綴、ク、ザ、リ
ト、云、フ、者、其、以、ヨ、リ、死、ニ、至、ル、マ、デ、為、志、カ、學、終、始、一、ノ、如
ク、ナ、ル、ヲ、見、ル、ニ、足、リ、然、而、シ、テ、名、節、ヲ、以、テ、人、ヲ、勵、マ、シ、
之、交、ヲ、好、マ、ズ、筆、ス、ル、所、ノ、著、數、本、ヲ、燒、ク、カ、如、キ、其、敦、厚、恭
謙、ナル、ノ、一、斑、ヲ、遺、フ、ニ、足、レ、リ、宜、ナ、ル、哉、時、ノ、名、儒、多、ク
其、門、ヨ、リ、出、テ、タ、リ、シ、今、世、ノ、學、者、其、為、志、カ、學、尋、常、ニ、趨
出、ス、ル、所、無、ク、シ、テ、聲、譽、ヲ、一、世、ニ、馳、セ、シ、ト、ハ、猶、ホ、貨、物、ヲ
有、ス、ル、コ、多、カ、ラ、ズ、シ、テ、質、易、市、場、ニ、日、利、ヲ、獲、ヒ、シ、ト、ス、ル
カ、如、シ、假、令、之、ヲ、得、ル、モ、時、ノ、名、節、聲、譽、ノ、ミ、久、ク、持、ム、バ
キ、モ、ノ、ニ、非、シ、

第一七 鹿野孝七郎幽囚セラレテ書ヲ著セシ事

孝七郎ハ東山ト號ス。元祿九年陸奥ノ磐井郡澁井村ニ生
マル。家世農桑ノ業トス。東山四五歳ニシテ、神史ヲ見ルヲ、
好ミ、九歳ノ時、挑片素忠ニ從テ句讀ヲ受ク。一年ニシテ四
書ハ經テ讀メス。稍長ブルニ及ビ、仙臺ニ遊ビ、富商大和屋
久四郎ノ家ニ寓ス。江カノ人吉田需軒ト云者、仙臺ニ遊ビ、
鹿ノ下ダシテ生徒ニ教授ス。東山從テ其講ヲ聞ク。一、九年、
又京都ニ遊ビ、業ヲ三宅尚齋ノ門ニ受ケ、又長崎ニ之キ講
説シテ、徒ニ授ク。其名稍諸儒ノ間ニ顯ハル。仙臺中將吉村、
遙ニ召シテ儒官ト爲シ、祿若干ヲ賜フ。時二年二十六、東山
府學ヲ設ケンコトヲ建議ス。富商鈴木八郎左衛門其事ヲ聞
キ、金ニ萬兩ヲ出シテ、興造ノ費資ヲ助ケント請フ。八郎左

備門ハ、嘗テ東山ニ學ブ者ナリ。東山之ヲ大夫ニ言フシ。遂ニ國侯ニ上疏ス。侯之ヲ許可シ。經營區畫。各壯大ヲ盡クシ。按撫礦瓦。皆宏麗ヲ極ハム。三年ニシテ成ルヲ告グ。廬シテ明倫堂ト曰フ。仙臺府學ノ盛ナル。諸藩ニ過グ。ルモ、其端ハ實ニ佐久間洞巖ト。東山ハ創始スル所ナリ。東山資性剛直ニシテ。權要ヲ避ケズ。嘗テ學舎ニ於テ諸有司ト其班次ノ高卑ヲ爭フ。アリ東山捍言シテ曰ク。經筵ノ看儀ハ卿等ヲ待タズ。執法大夫ト雖。此事實ル無シト。有司答フル。無クシテ去ル。後チ之ヲ卿ミ。勅スルニ藩制ヲ侮蔑シ。舊典ヲ遺棄スルヲ以テス。遂ニ之ガ爲メニ坐セラレ。加美郡宮崎村石母田長門ノ郷中ニ幽囚セラレ。其囚所ニ在ルト。一十四年。赦ヲ遭フテ郷里ニ放歸ス。時ニ版六十六。東山ハ

幽囚ニ在ル。ヤ。憾ムル所アリテ。無刑録十四篇ヲ著シ。略秋官ノ遺意ヲ述ブ。後チ。其書世ニ傳フ。識者稱シテ深意アリト爲スト云フ。東山晩年又仙臺ニ遊ビ。生徒ニ教授ス。安永五年歲八十一ニシテ歿ス。

櫻所子曰ク。東山邊上僻陬ノ農家ニ生長シテ。學ニ志シ。千里笈ヲ負フテ良師ヲ求メ。汲々トシテ倦怠スルヲ無ク。幽囚セラレ。一廿四年。又敢テ屈撓ノ色無シ。書ヲ著シ。道ヲ講ジ。鐸ヲ一方ニ振フ。其篤志力學知ルベキナリ。其耐忍剛毅思フベキナリ。今日ヲ以テ昔時ト對較セバ。書籍ヲ購求スルモ。師ヲ求メテ旅行スルモ。舟車ノ便否道路ノ險夷。相距ルヲ果シテ如何ゾヤ。苟モ篤志力學。敢テ怠懈セズンバ。邊鄙僻地ト雖。其便ハ昔時都府ニ生ヒタル者ト殊ナル。

無カラン。然レバ則チ勞苦ハ、東山其人ニ半バンシテ、功ハ必ズ之ニ倍セン。

第十八 石多仲曆子一冊ヲ廁中ノ壁ニ糊塗セシ事
石多仲ハ瀨濱ト號ス。奥州瀨ノ上村ノ農家ニ生ル。幼ニシテ學ヲ好ム。長ズルニ及ビ、江戸ニ遊ビ同地方ノ人ナルヲ以テ、餘熊耳ニ學ブ。瀨濱熊耳カ塾ニ寓ズル十年、日夜誦讀シテ怠ラズ。其几ニ對スル座下足著ク所爲メニ察ム。又毎年臘月ニ至レバ、必ズ曆子一冊ヲ買ヒ、之ヲ廁中ノ壁上ニ糊塗ス。其記性モ亦人ニ過グ。廁ニ之ク一十二次ニシテ來歲十二月ノ支子ノ運動時令ヨリ晝夜ノ短長、節氣相ニ至ルノ事ヲ暗記ス。而シテ後チ其糊ヲ去ル。以爲ク曆子ヲ展卷スル。廁ニ之クノ間ニ在ルトキハ、別ニ寸晷ヲモ費サ

ズト、年二十九ニシテ、惟ヲ芝ノ三田ニ下ダス。生徒稍集マル。其名時ニ顯ハレ、業將サニ大ニ行ハレシトス。歲三十八ニシテ、疾ヲ病ムデ歿ス。時寶曆八年ナリ。

櫻所子曰ク、瀨濱東奥ノ一村落ニ生長シ、其學ニ志シテ都門ニ留寓スル。廁ニ上ボルノ間モ、敢テ光陰ヲ空フセズ。宜ナル哉。其業將サニ大ニ行ハレシトスルニ及ベルノ惜ムラクハ天之二年ヲ假サズシテ、大成ニ至ラズ。然リトイハドモ其勉學怠ラザリシハ、以テ後進ノ標準ト爲ス可キナリ。

第十九 莊田靜志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ラ最メシ事
莊田靜琳菴ト號ス。少フシテ谷一齋ニ從テ學ブ。志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ラ最ム。僅カニ弱冠ニ踰エ、其學既ニ通シ、尤

毛談論ニ長ス。龜山侯（松平伊賀守忠晴）一タビ其通鑑
綱目ヲ講スルヲ聞キ之ヲ喜ブ。祿百五十石ヲ以テ之ヲ聘
ス。琳菴起テ之ニ應ジ。仕ヘテ侍讀トナル。歲二十八。琳菴天
資溫柔。退然トシテ衣ニ勝ヘサル者ノ若シ。而シテ人ト得
失ヲ論辯スルニ至テハ吐欵詰責。利害ヲ避ケス。譽諤ヲ以
テ人皆之ヲ忌憚ス。遂ニ奸人ノ讒構スル所ト爲リ。圜ニ
下ル。嘗テ獄吏問荅一卷ヲ著ス。經史ヲ諳記スル數千言。
一字ヲ舛マラス。獄ニ在ルコト四年。延寶二年十月ヲ以テ
棄市セラレ。

琳菴才識淵茂シ。常ニ學者ノ志アリテ。行ヒ未ダ果斷ナラ
ザル者ニ説テ曰ク。學ハ當サニ水ヲ習フガ如クスヘシ。之
ヲ淺處ニ習ヒ。而シテ後チ深キニ向フ。淺溺シテ死セント

欲スル者數次方ニ始メテ功ヲ見ル。若シ其溺ルヲ懼ヒ
テ淺處ヲ離レ得テ了ヒサレバ。終身水ニ在リト雖。亦數
尺ノ水ヲ游泳スルヲ能ハズト。

櫻所子曰ク。神原篁洲ノ言ニ曰ク。天下ノ技藝ニ各四等アリ。一ニ曰ク。下手。二ニ曰ク。切者。三ニ曰ク。上手。四ニ曰ク。名入。上下三千年。縱橫一萬里。存スル所。此ニ出テス。學者ハ道ニ於ケルモ亦然リト。琳菴ノ所謂終身水ニ在リト雖ドモ。亦數尺ノ水ヲ游泳スルヲ能ハザルハ。下手ナル者ナリ。泳ヒテ能ク數里ノ波濤ヲ凌グ者ハ。上手ナル者ナリ。而シテ其下手タリ上手タル所以ノ本ハ。他ナシ。淺溺セントスルヲ懼レテ淺處ヲ離レ得ザルト。敢テ淺處ヲ離レテ深キニ向フトニ由ル。夫レ安佚ハ淺處ナリ。辛苦ハ深處ナリ。辛苦

ヲ廢嘗シテ、凍餓セントスル者數次ニ至ルガ如クンバ、其
方ニ始メテ功ヲ見ルヲ得ルヤ必セリ。然ルニ今世ノ學術
技藝ニ志ス輩、多クハ其衣ハ麗ヲ欲シ、其食ハ鮮ヲ求メ、而
シテ大ニ得ル所アラント欲ス。我恐クハ終身學術技藝ニ
從事スト雖、所謂下手タルヲ免ガレザラントテ、何ソ名
人若クハ上手ノ地位ニ達スルヲ得シヤ。況ヤ躁進ヲ戒ム
ルヲ知ラス、已レガ學ビ得タル所ヲ沽ラシトスルニ急テ
ルヲヤ、苟モ其學ビ得ニ於テ、上手ト呼ビ名久ト稱セラレ
ントテ望マバ、須ラク淺溺シテ死セント欲スルニ至ル。辛
苦艱難ヲ辭ス可カラザルナリ。

第二十 細井德民篤志力學ニ由テ德望ヲ得タル事
德民平洲ト號ス。享保十三年、尾張ノ南鄙平洲村ニ生ル。家

世、農ヲ以テ業トス。平洲幼ニシテ讀書ヲ好ミ、歲十七ニシ
テ、京都ニ遊學セシト、請ヒ、單身ニシテ之ニ赴ク。伊勢ノ人
北島世規ト云者ト、舍ヲ同フシテ僑居ス。垢衣弊帶糲ヲ食
ヒ、蔬ヲ啗ミ、務メテ費用ヲ儉ニス。是ヨリ先キ父正長之ガ
爲ニ金五十兩ヲ與ヘ、其用ニ適セシム。京ニ在ルヲ一年十
兩ヲ費消ス。其餘ヲ以テ書數百卷ヲ購得シ。歸期ニ及ヒ、兩
馬ニ馱シテ還ル。郷里皆以テ之ヲ美談ト爲ス。平洲ノ京都
ニ遊學スルヤ、適ク諸儒ニ詣ルニ、學識品行ノ師資トス可
キ者ヲ見スシテ乃チ郷ニ歸ル。父母其持操ト勉學トヲ喜
ビ、將サニ田宅ヲ分ツテ生理ヲ爲サシメントス。平洲可カ
ズシテ曰ク、願クハ二百金ヲ得テ、兒ガ欲スル所ニ從ハシ
ト、乃チ之ヲ許ス。盡ク書ヲ買テ之ヲ讀ミ、足戶外ニ出テサ

此二一年。自。謂。是。レ。吾。カ。師。ト。ス。ル。所。ナ。リ。ト。延。享
 中。參。河。ノ。元。淡。淵。始。メ。テ。名。護。屋。ニ。來。テ。生。徒。ニ。教。授。ス。平。洲
 往。テ。之。ニ。謁。シ。相。與。モ。ニ。經。史。ヲ。商。推。シ。大。ニ。其。學。識。ト。品。行。
 ト。ニ。服。ス。以。爲。ク。師。事。ノ。入。ヲ。得。タ。リ。ト。淡。淵。稱。シ。テ。以。テ。吾
 カ。業。ヲ。羽。翼。ス。ル。者。ト。爲。ス。平。洲。廿。四。歲。ニ。シ。テ。唯。ヲ。名。護。屋
 ニ。下。ダ。シ。テ。教。授。ヲ。業。ト。爲。ス。幾。ク。モ。無。ク。江。戶。ニ。至。リ。芝。ニ
 寓。ス。淡。淵。歿。ス。ル。ニ。及。ビ。其。門。ノ。諸。子。皆。ナ。平。洲。ノ。門。ニ。入。ル。
 平。洲。ノ。名。始。テ。江。湖。ニ。噴。々。タ。リ。平。洲。江。戶。ニ。教。授。ス。ル。二。十
 年。許。リ。講。業。ノ。盛。ナル。殆。シ。ド。晝。日。無。シ。出。テ。ハ。則。チ。羽。侯。ノ
 ノ。講。筵。入。テ。ハ。則。チ。在。塾。ノ。子。弟。ヲ。教。育。シ。惟。レ。日。足。ラ。ズ。竟
 ニ。經。學。文。章。ノ。ミ。ナ。ラ。ズ。世。稱。ス。ル。ニ。其。人。ノ。經。濟。ニ。長。ズ。ル
 ニ。以。テ。ス。王。侯。貴。紳。請。テ。以。テ。師。ト。爲。ス。或。ハ。重。祿。ヲ。以。テ。之

召。カ。ン。ト。欲。フ。ル。者。ア。レ。レ。辭。シ。テ。仕。ハ。ズ。私。心。尙。カ。ニ。謂
 テ。ク。已。ム。ト。無。ク。ン。バ。則。チ。仕。ヘ。シ。尾。ハ。我。ガ。墳。墓。ノ。在。ル。所
 ナ。リ。仕。フ。レ。バ。則。チ。豈。他。ア。ラ。ン。ヤ。ト。年。五。十。ニ。シ。テ。尾。侯。ノ
 召。ニ。應。ジ。テ。侍。讀。ト。ナ。リ。督。學。ヲ。兼。ネ。シ。又。田。祿。四。百。石。ヲ。賜
 フ。平。洲。尾。藩。ニ。督。學。タ。リ。シ。ヨ。リ。國。シ。者。儒。及。ビ。弟。子。若。干。人
 ヲ。薦。メ。テ。學。職。ニ。充。ツ。國。中。ノ。民。皆。來。テ。教。ヲ。受。ケ。ザ。ル。ナ。ジ
 學。政。大。ニ。振。フ。之。ヨ。リ。先。キ。平。洲。年。四。十。四。米。澤。侯。上。杉。治。憲
 ノ。聘。ニ。應。ジ。テ。其。國。ニ。往。ク。侯。聰。明。ニ。シ。テ。志。ヲ。政。治。ニ。專。ラ
 ニ。シ。平。洲。ヲ。尊。ム。デ。賓。師。ト。爲。シ。禮。待。優。渥。ナ。リ。其。言。ヲ。嘉。納
 シ。舊。弊。ヲ。洗。滌。ス。留。リ。居。ル。丁。一。年。ニ。シ。テ。歸。ル。閩。境。比。隣。靡
 然。ト。シ。テ。風。ニ。嚮。フ。寧。水。中。米。澤。ノ。國。學。興。讓。館。新。築。成。ル。侯
 再。ビ。平。洲。ヲ。其。國。ニ。招。キ。得。失。ヲ。詢。謀。シ。政。刑。ヲ。參。定。ス。又。平

洲ト封内ニ巡行シ。使役ノ煩劇ト。民間ノ疾苦トヲ覆檢シ。百廢悉ク舉ガリ。豐施下ニ遍ネシ。衆民大ニ悦ビ。平洲ガ途ニ過ケルヲ見。感歎シテ淚ヲ垂レ。拜跪合掌シテ大慈大悲ノ活如來様ト謂フニ至ル。亦留ル一年ニシテ歸ル。是ヨリ後チ米澤封内治教ノ績。海内ニ顯聞シ。稱シテ當時ノ第一ト爲ス。此ノ如クナルヲ以テ平洲晩年ニ至リ。學識德望並ビ高ク。世ノ所謂儒者ニハ非ルナリ。凡ソ王卿侯伯。每ネニ平洲ト語ル。必ズ人ヲ屏ケテ時ヲ移ス。或ハ書牘ノ來ル。讀ミ了レバ多クハ手ヅカラ之ヲ焚ク。蓋シ其封國米邑ノ政令。綱紀機密。及ビ政事典型。必ズ預メ知ルアリ。然レトモ口ヲ箝シテ一言ハズ。病革ナルニ及ビ。書牘數十通。猶ホ篋寄ニ在ル者ハ。門人ニ遺言シテ。悉ク之ヲ其主ニ返ス。是

以テ家人ト雖也。其詳カナルヲ知ル能ハザリシト云フ。櫻所子曰ク。我邦門地ヲ以テ爵祿ヲ世襲スル。外邦ノ大爵アル者。布衣ヨリ起テ王侯ノ師トナルヲ得ルガ如キニ非リシナリ。然ルニ平洲尾ノ南鄙ニ生レ。吠畝ノ一匹夫ニシテ。而シテ其篤志力學。孜孜トシテ怠ラザル。遂ニ公侯縉紳ノ賓師トナリ。若クハ其顧問ニ備ハリ。有土ノ大諸侯モ。優渥ナル禮待ヲ以テスルニ至リ。其言行ハレ其計用并ラレ澤衆民ニ及ブ。何ゾ其レ盛ナルヤ。況ヤ今日材能ヲ以テ爵祿ヲモ取ルベク。事業ヲモ興ス可キノ昭代ナルニ於テ。後進ノ士。平洲ガ地下ニ含笑スル所トナルヲ無カラシメ。勉メヨ。

第廿一 並川彌右衛門論語ヲ讀ムヲ聞キシ事

並川彌右衛門ハ享保時代ノ人ニシテ丹波並川村ニ生ル
山城鳥羽ニ出テ、米商ヲ業トセリ。其子五一郎幼キ時人
ヲ雇フテ四書ノ素讀ヲ爲サシム。一日論語ノ吾黨ニ躬ヲ
直ラスル者アリノ章ヲ讀ムヲ聞テ曰ク是レ太々恠ムベ
キト云リ。子トシテ父ノ惡ヲ發バク何ゾ直シト謂フヲ得
ンヤト。次ニ孔子ノ吾黨ノ直キ者ハコレニ異ナリノ言ヲ
聞キ理宜ク此ノ如クナルベシ孔子ハ尊ブベキ人ナリト
云ヘシト云。

櫻所子曰ク此事酷ダ石勒ガ漢高六國ノ後ヲ立ントセシ
ヲ聞キ此法當固失トイヒ張子房ノ諫メシヲ聞キ幸有此
事ト云フニ似タリ。嗚呼未ダ學ハズト雖也之ヲ學ゼタリ
ト謂フベキモ人彌左衛門在リ。諺ニ所謂論語ヲ讀テ論

語ヲ知ラハ徒一商估ニ愧ル無キヲ欲スト雖也得ベカ
ラス。

第廿二 應舉心ヲ專ラニシテ繪事ニ刻苦セシ事

天明中京都ニ應舉字ハ仲選ト云者アリ。性畫ヲ好ム。以爲
ク肖貌寫生物ゴトニ其精ヲ極メント欲スレバ畢生カラ
殫スト雖也得ベカラス。其性ノ近キ所ニ因テ其妙ヲ窺フ
ニ若カズト。即チ雞及ビ狗子ヲ描ク。應舉初メ雞ヲ描クヤ。
自ラ謂ラク飲啄鳴號ノ狀振翮修羽ノ態既ニ其肖似ヲ得
タリ。但風神氣骨天氣活潑ノ妙猶ホ未ダ其精ヲ盡サズト。
乃チ日ニ祇園祠ニ至リ。雞ノ群ヲ爲ス者ヲ視。疑立シテ動
カズ。人以テ痴呆ト爲ス。而シテ顧ミザルナリ。此ノ如クス
ル者年アリ。一日恍然トシテ悟ルアリ。自ラ顧ルニ滿腔皆

雞ナリ。因テ試ニ掩障ニ就テ之ヲ寫ス。神米生動ス。真ト
 辨ズル無シ。之ヲ祇園祠ニ獻ス。人皆其巧手ナルヲ驚歎シ
 タリ。應舉猶ホ彼畫雞ヲ視テ。如何ナル批評ヲ爲ス者アラ
 ント。門生ヲシテ日ニ祇園祠ニ至リ。其評スル者アルヤ否
 ヤヲ窺ハシム。觀ル人唯其妙技ヲ感ズルノミ。一日賣雞翁
 アリ。掩障ヲ望ムテ佇立スルコト以時。獨語シテ曰ク。雞ノ傍
 ニ草ヲ描カザリシハ最モ可ナリト。其去ルニ及ヒ。門生尾
 シテ往ク。東洞院ニ至リテ。一門道ニ入ル。門生歸テ此事ヲ
 語ル。應舉翌酒肴ヲ携ヘ翁ノ家ヲ訪ヒ。懇口ニ教誨ヲ乞フ。
 翁ガ曰ク。吾畫ヲ知ル者ニ非ズト雖氏。常テ雞ヲ畜養セシ
 ニ。羽色ノ四時ニ變ズルヲ記臆セリ。足下ノ描キタルハ。冬
 ノ羽色ニ似テ。殊ニ精妙ナリシカハ。其後ニ草ヲ描カレザ
 リシヲ歎賞シテ。嚮ヘス獨語セシメ。

應舉或時卧猪ヲ寫シント欲シ。斯事ヲ八瀬ノ賣茶女ニ語
 ル。女曰ク。哉カ村落ニ放テハ數猪ヲ見ルヲ得。一日女來
 テ告ク。吾屋背ナル竹林ニ一猪ノ來リ卧スアリト。應舉直
 子ニ之ト伴テ往キ見ルニ。大ナル猪ノ眠レルアリ。故ニ熟
 視シテ之ヲ寫ス。後チ鞍馬ヨリ來テ炭ヲ賣ル翁アリ。此畫
 ヲ眺ス。曰ク。是ハ病猪ヲ寫ス。卧猪ニ非ズ。何トナレバ猪ハ
 眠ルト雖也。其背上怒毛竦堅スル者ナリ。此畫ハ定メテ病
 ヌル猪ノ卧シタルヲ視テ寫シタルナラント。應舉他日前
 ノ八瀬ヨリ來ル婦ニ問フニ。彼猪ハ二三日ヲ經テ其處ニ
 死スリト云フ。之ニ由テ應舉更ニ真ノ卧猪ヲ視テ。之ヲ寫
 シ。世ノ喝采ヲ得タリ。當時應舉ガ名聲翹然トシテ一時ニ

甲タルハ、斷線零楮、人争ヒ購フニ重賞ヲ以テセリト云。
櫻所子曰ク、應舉ガ心ヲ專ラニシ、思テ致ス。此ノ如クニシ
テ、務メテ人ノ言ヲ聞キ、以テ益ヲ得ルヲ欲ス。宜ナル哉。技
其極ヲ極ム、名モ亦隨テ著ハレタルト。夫レ世上百般ノ學
藝、技術未ダ、常テ師友切劘ノ功ニ藉テ、其美ヲ成サズンバ
マラサルナリ。今夫レ大都通邑人文ノ淵叢ニシテ、一技一
藝アル者、各々幟ヲ一方ニ樹テ、良師益友其人ニ乏シカラ
ズ。或ハ同僚タリ、或ハ朋友タリ、臂ヲ交ヘ、膝ヲ接スルモ、就
テ其學ヲ所テ正ス。ヲ知ラズ、語偶、其文章議論ノ疵瑕ニ及
ベバ、輒々拂然トシテ怒リ、面ニ顯ハレ、人ノ指摘スルヲ嘆
ル。故二人ノ揄揚ヲ悦ビ、傲然トシテ自ラ夸テ曰ク、我學藝
天下ニ敵無シト、諸レヲ已ニ反蒙スレバ、果シテ益スルト

コロアルカ、將タ損スル所アルナリ。嗚呼、俗日ニ澆漓ニシ
テ、學術技藝ノ進歩顯著ノルモノ鮮シ。應舉ノ事以テ、流俗
ニ鍼砭ス可シ、豈ニ唯繪事ノミナラムヤ。世人文章議論ニ
長ジ、學術技藝ニ老タルヲ以テ、稱シテ名家鉅匠ト爲スモ
ノ、以テ識ムルヲ知ル可シ。豈ニ唯後進者ヲシテ、驕心ヲ生
ゼシメザルノ資ト爲スヘキノミナランヤ。

第廿三 森祖仙三年山ニ在テ其技ヲ切磋セシ事

森祖仙ハ、大坂ニ在テ猿ヲ畫クニ名アリ。初メ長崎ニ在リ
シ時、獵者ニ托シテ一ノ猿ヲ得タリ。因テ之ヲ庭樹ニ繫キ、
其傍ニ在テ猿ノ狀貌ヲ熟視シ之ヲ寫ス。鍛鍊スル丁、年ヲ
リ、稍其真ニ逼ルヲ覺フ。遂ニ之ヲ絹素ニ淨寫シテ、清客某
ニ贈シ、其批評ヲ乞フ。客曰ク、惜クハ此レ人家畜養ノ形ヲ

ニシテ天然ノ趣ニ非スト。祖仙之ヨリ更ニ奮勵シ深山ノ中ニ棲遲シ。木石ト居リ猿鶴ト群ヲ成ス。三年遂ニ其真ニ通ルハ妙ヲ得タリトイテ。

櫻所子曰ク夫レ畫ハ一小時ナリ然レ氏其業ニ從事スル者我ノ精妙ナルヲ欲スレバカヲ用ユルコト此ノ如シ之ヲ以テ遂ニ其妙ニ至ル況ヤ技ノ畫ヨリ大ナル者ニ於テヤ

第廿四 熊代彦之進虎園ノ前ニ在テ虎ヲ畫キシ事彦之進名ハ斐。繡江ト號ス世人通稱ヲ言ハス熊斐ヲ以テ知ラル肥前長崎ノ人ナリ幕府ノ譯官タリ人トナリ膽氣アリ清人沈南頓ニ從テ畫ヲ學ビ畫名一世ニ高シ或時台命ヲ奉ジテ虎ヲ畫ク恰モ好シ赫然虎ヲ載セ來リニ際

ハ斐、虎、園、ニ、近、キ、肖、貌、寫、生、其、精、ニ、極、ノ、ト、セ、シ、ニ、虎、蹲、踞、シ、テ、頭、ヲ、舉、ゲ、ズ、斐、其、動、作、ノ、態、ヲ、見、ル、ニ、由、ナ、キ、ヲ、以、テ、傍、ニ、在、ル、竹、頭、ヲ、執、テ、虎、ヲ、敲、ク、虎、大、ニ、怒、リ、怒、チ、頭、ヲ、擡、ク、斐、ヲ、嚇、ス、電、目、人、ヲ、射、テ、爛、々、タ、リ、傍、人、皆、驚、愕、シ、テ、奔、リ、避、ク、斐、獨、リ、自、若、ト、シ、テ、虎、ノ、狀、貌、ヲ、熟、視、シ、テ、之、ヲ、寫、セ、リ、始、メ、驚、愕、奔、避、セ、シ、者、其、膽、勇、ニ、服、セ、リ、ト、イ、フ、

櫻所子曰ク、獸虎ヨリ猛ナル無シ。膳臣巴提使ガ虎ヲ斬ルガ如キハ、勇武ヲ以テ名ヲ得タル人宜ク然ルミシ。彼如藤嘉明ガ、虎ヲ牽テ前ヲ過グル者アリ。傍人喧噪シテ走り避ク。嘉明ノミハ柱ニ倚テ坐睡シテ知ラサル者ノ如ク。少時テツテ目ヲ開キテ、何ゾ太ダ喧キ。虎ヲ牽テ過グル者アリ

シマト云ヒシガ如キ、豐公ノ麾下ニ指ヲ屈スルノ猛將
ハ、又宜ク此ノ如クナルベシ。斐ハ一介ノ譯官ニシテ、畫
ニ巧ミナル者ノ如ク、然カモ能ク虎園ノ前ニ在テ筆ヲ揮ヒ、
之ヲ歐打シテ、震怒ノ態ヲ熟視シテ動カズ、我ハ其膽勇ニ
驚カズシテ、其畫ニ篤志ナルヲ嘆スルナリ。斐ガ畫ノ爲メ
ニ勉ムルノ至レル此ノ如シ、其寫出セル所ノ虎、亦必ず狗
ニ類セズ、眼中自ラ百歩ノ威ヲ具ヘシナラム。斐ガ丹青ヲ
以テ、名ヲ一世ニ擅ニセシモ亦宜ナリ。一技ニ長スル者其
カヲ用エル、虎威ヲモ避ケズ、今ノ書ヲ讀ミ道ヲ知ラント
スル者ニシテ、猶ホ風雨寒暑ヲ懼ル、豈一畫師ニ羞ルナキ
ヲ得シヤ。

第廿五 池無名發憤苦勵七事

池無名字ハ、信成、九霞、山樵ト號ス。京都ノ人ナリ。世一上、雅

堂ト稱スル是ナリ。書ヲ善クシ、畫ヲ以テニス。書ハ晉唐ノ
古帖ニ刻意シ、結體飄逸、自ラ一家ヲ成ス。畫法ハ則チ梅道
人倪雲林ノ間ニ出ヘシ。專ラ氣韻ヲ以テ主ト爲ス。山水尤
モ清絶ナリ。世人争テ之ヲ購ノ、零鏹斷楮ト雖、尺寶重セザ
ルハ無シ。是ヨリ先キ、狩野氏土佐氏世畫苑ノ冠冕ト爲ル
其ノ後、餘皆宋元諸名家ニ出ヅ、而シテ授受寢、其真ヲ失ヒ、
卒ニ變ジテ染俗トナル。有志ノ士其弊ヲ矯メテ之ヲ復セ
ント欲シテ、力以テ之ヲ振フニ足ラス。獨リ貧成才、最モ萬
カ、志最モ篤シ、勤メテ必ズ法ヲ獲且ニ取ル、而シテ時人未
ダ之ヲ信ビ、嘗テ畫扇ヲ齎ラシ、尾濃諸列ニ遊ブ、一握モ
售ハズ、困ハデ歸リ、瀬田ノ橋ニ抵リ、怒ク之ヲ水中ニ投ジ、

三十一

益發憤苦勵シテ遂ニ古人ノ堂奥ヲ窺フ。名聲隆々然トシテ海内ニ震フ。而シテ畫ヲ言フ者宋元諸家ヲ以テ準據ト爲サ。ハ無キニ至ル。貧成性山水ヲ好ム。又濟勝ノ具ニ富ム。千里孤往。月ヲ經テ返ルヲ忘ル。層巒複嶺。飛屐上下ス。其高峻ヲ極メザレバ止マズ。最モ富士山ヲ愛シ。屢之ニ登ル。每ニ其路ヲ異ニス。榛莽ヲ披キ。狐兔ノ蹊ヲ攀テ。人迹ノ未ダ至ラザル所ヲ究ム。先後作ル所。富士山ハ圖凡ソ一百嶺。橫側正偏。其妙ヲ備極シ。天下ノ絶筆ト爲ス。

櫻所子曰ク。大雅堂嘗テ画扇ヲ齎ラシテ尾濃ニ遊ブヤ。一握モ售レズ。其能ク古人ノ堂奥ヲ窺フニ至テハ。則チ零碎齎楮ト雖。人争テ之ヲ購フノミナラズ。海内ノ畫風ヲ一變シ。狩野氏土佐氏ノ土流ヲ壓倒スルニ至ル。其天下ノ絶

筆ト稱セラハ。ヲ以テ今ニ至ルマデ其畫幅ヲ傳フル者

ハ。十襲珍徽ス。貧成何ヲ以テ其妙ヲ極ムルコト此ノ如ク

ナルヲ致セシヤ。曰ク其志ノ最モ篤クシテ。發奮苦勵セシニ由ルノミ。其人タル襟度蕭散。塵垢以テ其懷ヲ潤セザルヲモツテ。奇致盆涌スト云フガ如キハ。抑モ末ナリ。

第廿六 皆川淇園讀書ニ勤勉セシ事

淇園又銘齋ト號ス。京都ノ人ナリ。年四五歳ニシテ早ク文字ヲ識レリ。其父試ニ杜少陵ガ秋興八首ノ詩ヲ書シ與ヘシニ。日アラズシテ記臆セリ。是ヨリ讀書ヲ課トス。督促ヲ煩サズ。其父恆ネニ世儒記誦ノ學ヲ賤視シ。嘗テ明經弘道ニ志シアリト雖。氏年已ニ老タレバ。其事業ヲ成就スルコト難シトテ。淇園及ビ其弟成章ニ命シテ。其志ヲ繼ガン

經史百家ノ書ノ聞見ヲ資ケ、學識ヲ長ズベキ者ハ、需ム
ルニ隨テ之ヲ與ヘ、當時ノ宿儒博學ノ人々ニハ、普ク交
リテ結ビテ來往ヒシメタリ、成章ハ、人ノ辨論スル所ヲ聞
テ、轉テ曉通シ、言ノ畢ルヲ待タズ、淇園ハ、蒙昧ニシテ通ゼ
ザル者ハ、如ク詳悉ニ疑ヒテ質リ、レバ止マズ、人ヨクニ
子ノ優劣ヲ辨スルヲ無シ、然レトモ、凡ク古今ノ載籍ニ涉
リ、見ルコト罕レナル者ニ至テハ、必ス搜索ヲ窮メテ窺ハ
ザル所無キハ、成章遠ク淇園ニ及バズトス、淇園或時其作
ル所ハ、文ヲ一老儒ニ示シテ、正ヲ乞フ、輒チ數字ヲ改メタ
ルノミ、其字義ヲ問ヘバ、改メタル文字、稍優ルヲ覺エトス
テ、其優ル所以ヲ説カズ、淇園竊カニ謂ク、文ヲ綴ルニ字
義ヲ知ラスシ、ノ豈可ナランヤ、況ヤ經義ヲ解スルヲヤト

之ヲリ、心ヲ字學ニ傾ク、沈潛反覆シ、字典ノ訓詁也者多ク
ハ、假借ニシテ實ヲ得ルコト難シ、古人ノ字ヲ用ユルハ、例
ヲ類集シテ、其理ノ考覈シテ、通曉スルニ如カスト、象形ニ
由リ、聲音ニ求メ、始メテ言外ノ妙所ヲ得之ヲ、六經ニ徴シ、
子史ニ照シ、旁引會通シテ、審カニ孝悌忠信、仁義道德ヲ釋
シテ、名蹟六篇ヲ作ル、且ツ易詩書儀禮戴記、春秋論孟學庸
ノ諱解、凡ソ數百萬言、皆世ニ行ハル、其易ニ於テカテ用ユ
ルコト最モ深シ、義ヲ思フテ得ザレバ、終夜寐ネズ、晨起机
ニ對シテ、明ヲ俟チ、食スルニ方テモ、書ヲ傍ラニ置キ、且ソ
食シ且ツ讀ミ、暮ノ移ルヲ覺ヘズ、又門人ノ來テ教ヘテ乞
フアリ、若クハ客來テ談話スルアル氏、机ニ對スルマ、ニ
シテ、座ヲ移スコト無シ、門人退キ客去レバ、書ヲ讀ムコト

日入... 卷之三... 四

復々初ノ如シ故ニ奴婢ノ其室内ヲ掃フコトアリト。淇園
 座ニ及ブ能ハズ一日淇園ノ出タルヲ窺ヒ机邊ノ座ヲ
 掃ハント其座スル所ヲ見ルニ厚席^{コト}_撫シテ踏黒ナリシ
 猶且ツ其席ヲ徹シテ腐朽床ニ及ベリト其勤^{コト}勉^{コト}書^{コト}ヲ讀^ム
 ハ尋常ナラザルヲ知ル可シ文化乙丑ノ歲西隣ノ地ヲ買
 ヒ學堂ヲ建テハ弘道館ト名ク其門人ヲ遇スル威アツテ
 嚴ナラズ愛シテ狎レシメズ縉紳先生ヨリ學士太夫ニ至
 リ及ビ商賈農家ノ子弟ト雖氏應接待遇一モ殊ナルヲナ
 シ權貴ニ屈セズ寒素ヲ賤シメズ其門ニ入テ業ヲ問フ者
 先後三千餘人ニ及ブ淇園其詩賦文章ノ如キハ意判り筆
 隨ヒ言ハント欲スル所手ヲ下セバ則チ粲然トイ章ヲ成
 スコトクヲ用エルル無シ所謂讀書一萬卷筆ヲ下シテ神

ナルモハハルバシ文化ノ外ノ夏病ムテ食セズト雖氏且
 タ書ヲ講シ門人ヲ率ユルト平生ノ如シ其五月十六日ヲ
 以テ歿ス享年七十四ナリシト云フ
 櫻所子曰ク成章ハ才思活潑ニシテ人ノ論辨スル所ヲ聞
 テ言ノ畢ルヲ待タズシテ能ク曉通ス淇園ハ沈着ニシテ
 反覆疑義ヲ質サザレバ止マズ而シテ二子ノ學識ヲ比較
 スルニ淇園ハ復カニ成章ノ右ニ在リ是其勤勉ノ力成章
 ノ能ク及ブ所ニ非ルヲ以テナリ才思人ニ過グルアリト
 雖氏勉力足ラザルハ翻テ鈍才ニシテ勉強尋常ニ超ユ
 ル者ニ及バザル古來其例多シ少年才子深ク自ラ誠メズ
 ンバアル可カラザルナリ

第二十七 賴子成勉強刻苦シテ其志ヲ達セシ事

子成名ハ襄通稱ハ久太郎其父春水藝州竹原ノ人初メ大
阪ニ寓シ徒一校ク飯岡氏ヲ娶リ安永九年子成ヲ江戸城
坊ニ生ム子成甫六歳忽ク其母ニ問テ曰ク天ハ何如ナ
ル物ソト母曰ク旋轉止マズ彼ガ如キノ人ト子成庭ニ下
リ天ヲ仰ギ嘆ジテ曰ク不可思議ナル哉ト帝泣半時許リ
八九歳ヨリ喜ムテ古來ノ軍記ヲ讀ミ寢食ヲ忘ルニ至
ル既ニ句讀ヲ受クルニ及テ晝夜懈ラズ早ク雄邁俊偉ノ
志氣ヲ抱ク寛政五年子成年十三ニシテ一詩ヲ賦シテ曰
ク

十有三春秋逝者已知水天地無始終人生有生死安得類
古人千載列青史

亦其志ノ存スル所ヲ見ルニ足レリ嘗テ眼ヲ患フ春水固

ク書ヲ讀ムノ禁ズ陰カニ之ヲ讀ムデ止マズ年十四五家

庭ニ學ビ小學近思錄皆已ニ誦習ス一日書ヲ曝ス東坡ノ

史論ヲ讀ミ嘆ジテ曰ク天地間此ノ如ク喜ブベキノ文又

ルカト速ニカヲ文章ニ肆ニス最モ史學ニ精シ即チ史ヲ

著シ文ニ仕シ以テ後世ニ垂ントス而シテ其書ヲ著スル

ヤ身大都ニ屈天下ノ英俊ト交リ書ヲ讀ム多カラザレバ

則チ能ハズ之ヲ以テ早ク遠遊ヲ思フ父母尚ホ之ヲ膝下

ニ羈セント欲スルヲ以テ果サズ年十八叔父杏坪ニ從ヒ

東遊シ尾藤ニ洲ノ塾ニ在ル一年才學日ニ進ム即チ藩ヲ

脱シテ京ニ赴ク是ヲ以テ罪ヲ越疆ニ得仕藉ヲ免ス文化

七年菅茶山其塾生ヲ督センコトヲ請フ乃チ備後ニ遊フ

翌年去テ京都ニ遊ビ遂ニ止ル年三十二子成常ニ昇平川

久ク士氣ノ振ハザルヲ慨ス故ニ氣節ヲ以テ自ラ持シ以テ人ヲ導ク未ダ嘗テ已レヲ屈シ人ニ隨テ浮沈容ヲ求メズ其故國ヲ去ル誓テ曰ク已ニ父母ノ國ニ仕フル能ハズ後々官散リ著ケテ貴人ヲ見ズト而シテ京ニ入ル後子藝列侯ノ往來伏見ヲ過グルヲ聞ク必ズ袴ヲ着ケ南ニ嚮テ望ミ拜ス諸藩之ヲ聘スレバ皆固辭シテ應ゼズ日野大納言資愛文辭ヲ好ミ都下ノ諸儒ヲ招キ支守欽ヲ爲ス其名ヲ聞キ之ヲ請スレバ往カズ其請數回ニ至ル乃チ陳ス野人禮節ニ習ハズ若シ野服出入シ及ビ賜予ノ際臣禮ニ類スル者ナクンバ則チ敢テ命ヲ奉ビシト大納言之ヲ許ス乃チ往ク翠日金ヲ餽リ以テ謝ヲ爲ス子成之ヲ見テ曰ク豈禮幣ニシテ人ノ名ヲ小書低書シ自ラ已ガ名ヲ大

署スル者アラシマト門生ヲシテ之ヲ返却セシム大納言

從テ之ヲ謝シ蓋其屈セサルヲ敬ス爾後自ラ其蘆ヲ訪フ

ニ至ル一日子成ヲ召シ宴ヲ賜フ醉後戲レニ畫ヲ作クル

一大藩侯見テ之ヲ喜ビ人ニ介シ朝鮮布二幅ヲ寄セテ畫ヲ請フ子成慨然トシテ曰ク我ヲ以テ畫工ト爲スカト乃チニ絶句ヲ作り其布ニ大書シテ之ヲ返ス其一ニ曰ク

曾謝橫經弄翰儒寧能餘技備觀娛胸中畫本猶堪獻彷彿

幽風七月圖

家藏書無シ四子五經東坡集唐宋八大家文數品本朝ノ史ハ唯烈祖成績藩翰譜ノミ而シテ古今ノ史籍制度兵法及ヒ家譜野乘涉獵セサルハ無シ終ニ能ク外史政記ノ大著作ヲ成ス一生アリ外史ヲ請フ子成之ヲ領ス後子又來

促シテ曰ク。一權責ニ獻セント欲スト。子成色ヲ正フシテ
曰ク。我が史ハ、權門媚ヲ納ルハ、ハ具ニアラズト。竟ニ與ヘ
ズ。

子成名既一、一時ニ重シ。京ニ遊ブ者多ク來テ見ユルヲ求
ム。一切謝絶シ、已ムヲ得ザルニ非レハ則チ見ズ。平生讀書
ニ耽リ、著述ヲ勤ム。常ニ門生ニ謂テ曰ク。我ヲオ子ト謂フ
ハ、未ダ我ヲ悉クサズル者ナリ。我ヲ能ク刻苦スト謂フ者
ハ、真ニ我ヲ知レリト。夕バニハ則チ燈ヲ挑ゲテ書ヲ讀ミ、
五更ニ至テ後チ寢ニ就ク。朝夕ニハ則チ起キ、自ラ衾襦ヲ
収メ、戸牖ヲ掃ヒ、以テ常ト爲ス。寒暑ト無ク一ナリ。其人ニ
接スル畛域ヲ設ケズ。直チニ錫漏ヲ吐ク。人苟モ其意ニ違
ヘバ、對面詰責シテ少クモ假借セズ。改ムレバ則チ止ム。未

ダ著テ毫モ意ニ介セズ。門生ニ教ユル甚タ意ヲ用ユ書ヲ

講スルニ枕聲飾辭セズ。恂々トシテ談話ノ如クシ。倦メバ

則チ煙ヲ吹キ茶ヲ喫シ。必ず蘊典ヲ摘發シ。妙旨ヲ剖析シ。
人々ヲシテ了然タラシメテ後チ止ム。天保元年、胸痛ヲ患
フ。久シクシテ愈ユ。同三年六月、忽チ咳嗽ヲ發シ。血ヲ咯ス。
醫曰ク。是レ積年精神ヲ勞スルノ致ス所。所謂肺血疾ニメ
治スベカラザルナリ。先生ハ囊際ニシテ死ヲ怖レズ。敢テ
實ヲ以テ告グト。子成笑テ曰ク。死生命アリ。然レモ我レ老
母アリ。且ツ志業未タ成ラズ。假令一ノ生理無キモ。宜ク醫
療ヲ加フベシ。慎ムテ藥ヲ服シ。傍ラ死計ヲ爲サンノミト。
時方ニ日本政記ヲ著ス。乃チ日夜勉強シテ稿ヲ構ス。曰ク。
我レ必ス之ヲ成シテ地ニ入ラントスト。秋ニ及ビ。疾益劇

シ。然レ氏客至レバ談笑自若タリ。偶猪飼散所來リ訪ヒ。茨
南北朝ノ正統ノ事ニ及フ。譏大ニ合ハス。子成曰ク。苟モ北
朝ヲ以テ正統ト爲ス。豈ニ新田楠諸公ヲ以テ亂臣賊子ト
爲シヤト。目張リ眉軒ガル。其慷慨激烈。病ムト雖氏衰ヘズ。
遂ニ更ニ正統論ヲ著シ。之ヲ政記中初論ノ後チニ置ク。子
成ノ議論用ニ適スルヲ以テ主ト爲ス。書名亦謙シ。ト雖
氏。緒餘ノミ其常ニ心ヲ用ユルハ經濟ノ學ナリ。故ニ弱冠
ヨリ以來。蘇軾ガ策論ニ擬シ。新策十餘篇ヲ作り。晚年ニ及
ビ頗ル之ヲ刪潤ス。即チ通議ナリ。死ニ先タツ三日。忽チ曰
ク。猶ホ言ハサル可カラザル者ノ在ルアリト。即日之ヲ草
ス。内廷篇是ナリ。外史ハ凡ソ二十年ヲ經テ成ル。而シテ後
チ猶ホ之ヲ家ニ秘ス。白河樂翁少將之ヲ聞キ禮ヲ拜フシ

以テ之ヲ請フ。是ヨリ遂ニ世ニ行ハル。政記最モ晚年ノ作
ニシテ記事多ク病中ニ成ル。而シテ終ニ全ク稿ヲ脱スル
能ハザリシナリ。子成病既ニ革カナリ。曰ク。我が死方ニ逼
レリト。然レドモ猶ホ眼鏡ヲ著ケテ。政記ヲ手ニシ。刪潤シ
テ止マス。忽チ左右ヲ顧ミテ曰ク。且ク喧キナカレ。我將サ
ニ假寐セントスト。乃チ筆ヲ闕シ。眼鏡ヲ脱セズシテ瞑ス。
就テコレヲ無スレバ則チ逝ク。年五十三。天保三年九月ナ
リ。

櫻所子曰ク。子成ノ著スル所外史政記ノ如キ。全國ニ傳播
シ。初學ノ國史ヲ讀マントスル者ノ。闕クベカラザルノ書
トスルニ至ル。而シテ徳川氏ノ季世勳王ノ士輩出スト。雖
氏國內一般ニ貴賤ト無ク。王室ヲ尊ビ。幕府ヲ賤ムヲ知ル。

二至リシ者、子成カ史ヲ修メ、其言辭ノ慷慨激切ナル、大ニ
人心ヲ感動セシ者、與ツテカアリト謂フモ、大過ナカラシ。
彼大日本史ノ如キハ、卷帙浩繁、其載スル所亦詳明ナリト
雖、水戸藩侯ノ學士ヲ招集シテ編纂スル所、即チ官撰ノ
書ナリ、外史政記ノ如キ、子成布衣ノ士ニシテ、善ク之ヲ成
ス、殊ニ其家藏書ニ乏シク、僅カニ烈祖成績藩翰譜ノ二書
ノミ、他ハ數部ハ漢籍ニ過ギズト云フ以テスレバ、其引用
ノ書ヲ借覽シ、或ハ抄録スル等、苦辛思フベシ、而シテ其政
記ノ如キハ、病大ニ漸ムニ及ンテ、猶ホ手ヲ釋カズ、此ヲ刪
潤シ眼鏡ヲ著ケテ、眼スルニ及ヘルセ、實ニ勉メタリト
謂フベシ、子成年猶ホ幼クシテ、既ニ古人ニ類シテ、手載ノ
後、キニ至ルマテ、名ヲ竹帛ニ垂ル、ニ志アリ、稍長ズルニ

及ビ、時ノ不可ナルヲ知り、敢テ仕ヲ求メス、權貴ニ内ネラ
ズ、史ヲ著シ以テ後世ニ垂ントスルヤ、屬續ノ間、猶ホ手ヲ
釋カズト云フニ至ル、宜ナル哉、其成業ノ卓然トシテ能ク
其言ヲ踐ミ、其志ヲ達シ、之ニ於テ垂髫兒ト雖、山陽山陽賴襄
アルヲ知ラザル者無キヲ致セルヲ、其此ノ如ク志ヲ遂ケ
得タル所以ハ何ゾヤ、其自ラ我ヲ才子ト謂フハ、未ダ我ヲ
悉クサバ、ル者ナリ、我ヲ能ク刻苦スト謂フハ、真ニ我ヲ知
ル者ナリト謂フヲ以テ見レバ、蓋シ子成モ亦刻苦勉強ヲ
以テ之ヲ成就セシモノニ外ナラザルヘン、若シ之ヲ天稟
ノ史才筆力アリテ然ル者ト爲ストキハ、子成豈ニ首肯セ
ンヤ、今ヤ日新進歩ノ隆運ニ際シ、興スベキノ事業、學ブベ
キノ藝術、數フルニ勝ユベカラス、誰カ能ク雄邁俊偉ノ志

氣ヲ抱キ、古人ニ類シテ千載青史ニ列スルヲ期スル者
ゾヤ、誰カ能ク刻苦勉勵、日夜怠ラザル、子成其人ニ減ゼサ
ランヲ誓フ者、ソヤ。

第二十八 古川某地理ヲ究メンカ爲メニ海内ヲ歴

遊セシ事

古川某ハ備中ノ人ナリ、幼ニシテ大志アリ、地理學ヲ喜ブ、
學兼クル所無シ、少小ヨリ海内ニ派遣シ、奥羽ニ於リ、鰯浦
ヲ渡リ、蝦夷ヲ窺ヒ、筑紫薩隅ヲ究メ、鬼界島ニ至ル、其間鳥
道ヲ攀チ、洪波大濤ヲ涉リ、饑寒困頓、舟殆ド覆ヘリ、溺没セ
ントスト、雖氏自若ナリ、山谷ノ形態隆然タリ、崖巖タリ、及
ビ眺覽スル所、樹莽ノ如ク、波瀾織ルガ如キノ狀ヲ寫ス、畫
ニ正シナル者、如シ、尤喜ムテ近古戰爭ノ跡ヲ尋ネ、其攻

守勝敗ノ由ル所ヲ觀、鈎股法ヲ以テ遠近高低ヲ揣カリ、圖
說ヲ著ハシ、鑿々トシテ據アリ、嘗テ世ノ兵ヲ以テ家ニ名
アル者ヲ罵テ曰ク、此輩ハ芋ヲ煮テ熟否ヲ辨セザル者ナ
リ、焉ンゾ實用ニ施スベケンヤト、寛政中、閩老越中守白川
侯路ニ當ル、意ヲ海防ニ注ギ、關東諸港津ヲ巡視ス、某ノ名
ヲ聞キ、遠ク召致シ、詢フ所アラント欲ス、即チ往キ、謁シ、問
ニ隨テ、指畫ス、應對流ル、ガ如シ、侯大ニ之ヲ奇トス、尋デ
命ヲ受ケ、武藏五郡ノ圖譜ヲ鑿正ス、旨ニ稱フ、遂ニ翁ヲ祿
セント欲ス、人ニ意ヲ以テ、某ヲ喻サシム、某晒テ曰ク、吾老
タリ、折腰ノ事ヲ習ハスト、直チニ歸テ室ヲ某郷岡田村ニ
築キ、門ヲ杜ヂテ書ヲ著シ、咏歌自ラ娛ム、嘗テ人ニ謂テ曰
ク、大丈夫無事ノ時ニ生レ、已ニ彼ノ富貴白山ヲ盆玩シ、大

湖茅澤ヲ沿視スル者ト相周旋スル能ハズ今世ノ所謂薦紳先生ハ偏裨ハ用ニ供スルニ足ラズ某々ハ差可ナルノト

櫻所子曰ク頼山陽某ノ事ヲ記シテ曰ク其海内輿地及ビ四隣畧圖ヲ觀ルニ世ノ地圖ト大ニ異ナリ州郡ノ界ヲ畫セズ特ニ山川脈理ヲ示シ畧列名ヲ傍ニ署スルハ余此ニ因テ海宇ノ大勢ヲ識ルヲ得已ニシテ四方ニ遊ヒ以テ之ヲ驗スルアリ史ヲ作り且ツ事ヲ論ズルニ及ビ依據スル所多シ皆ナ翁ノ賜ナリト亦以テ某ノ羨クル所無クシテ而シテ大ニ得ル所アルヲ見ル可シ思フニ某ハ太平無事ノ日ニ生レ奮然トシテ地理ノ學ヲ實際ニ就テ研究セント欲シ跋渉ノ勞ヲ辭セス脚跡靖蜒全州ニ遍ネシ當時

舟楫ノ便ナラザル道路ノ險惡ナル其困苦想フ可キナリ今世ノ人士學藝技術ニ刻苦奮勵スル山中某ノ如クナラシニハ何事カ成ラザラン而シテ其功烈亦昔時ノ如ク湮没セズシテ永ク美名ヲ日本文明史ニ輝カスアラント必セリ今日ニシテ學術技藝ニ奮勵スル所無クシバ將タ何ノ日ヲ待タシヤ

第二十九 森宇左衛門書ヲ手寫シ數十卷ニ至リシ事

森宇左衛門字ハ白高江戸ノ人也世舉母ノ城主内藤侯ニ事ヘテ宰臣ト爲ル白高人ト爲リ慷慨ニシテ勉強ハ力人ニ過絶ス學ヲ好ミ凡ソ治邦安民ヨリ兵法火術籌海書ニ至ルマデ佳著ヲ得レバ輒チ之ヲ手寫ス膏ヲ焚キ晷ニ繼

抄。攷。々。ト。シ。テ。倦。マ。ズ。謄。録。ス。ル。所。數。十。筐。ニ。及。ブ。積。ム。テ。座
右。ニ。置。キ。反。覆。披。展。シ。朱。黃。爛。然。タ。リ。必。ズ。其。要。領。ヲ。得。テ。止
ム。白。高。官。事。鞅。掌。ト。雖。氏。而。カ。モ。閑。ヲ。偷。シ。達。人。名。士。ト。交。リ。
鹽。谷。官。陰。川。西。士。龍。安。井。仲。平。芳。野。叔。果。等。ト。詩。酒。徵。逐。ス。時
ニ。天。下。晏。然。ト。シ。テ。四。境。無。事。ナ。リ。然。レ。氏。白。高。清。國。ニ。鴉。片
ノ。亂。アル。ヲ。聞。キ。竊。カ。ニ。杞。憂。ヲ。抱。キ。友。ト。相。遇。フ。輒。チ。兵。備
ヲ。論。究。ス。最。モ。心。ヲ。海。防。ニ。留。ム。日。夜。勞。晝。ス。ル。所。ア。リ。以。テ
事。ニ。施。ス。ヲ。思。フ。中。風。ニ。罹。リ。文。久。三。年。歲。五。十。九。ニ。シ。テ。歿
ス。
櫻。所。子。曰。ク。白。高。一。藩。ノ。宰。臣。ト。シ。テ。官。事。鞅。掌。ノ。間。能。ク。一
時。ノ。名。士。ト。交。ル。ス。ヲ。尋。常。俗。吏。ト。同。視。ス。可。カ。ラ。ズ。其。清。ニ
鴉。片。ノ。亂。アル。ヲ。聞。キ。海。防。ノ。事。ヲ。畫。ス。亦。憂。國。ノ。士。ト。謂。フ

可。況。況。々。書。數。十。筐。ヲ。手。寫。シ。座。右。ニ。積。ム。反。覆。披。展。ス。ル
ニ。至。ル。篤。志。ト。謂。フ。可。キ。ナ。リ。

第三十 觀世次郎太夫儉父ヲ師トセシ事

猿。樂。ニ。觀。世。部。ナル。者。ア。リ。足。利。氏。ノ。時。ニ。著。ハ。レ。累。世。業。ヲ
襲。ヒ。德。川。氏。ノ。時。ニ。至。ル。次。郎。太。夫。ト。云。者。ニ。至。テ。尤。モ。著。ハ
ル。ト。云。フ。猿。樂。ニ。曲。名。木。賊。ト。稱。ス。ル。者。ア。リ。最。モ。エ。ミ。ナ
リ。難。シ。世。奏。ス。ル。ニ。エ。ナル。者。ナ。ク。シ。テ。次。郎。太。夫。獨。リ。此。曲
ヲ。以。テ。著。ハ。ル。每。ニ。之。ヲ。奏。ス。諸。伶。部。號。シ。テ。善。伎。者。ト。稱。シ。
皆。嘆。稱。シ。テ。措。カ。ス。次。郎。太。夫。モ。亦。自。ラ。謂。ラ。ク。天。下。ノ。此。曲
ニ。妙。ナル。者。我。ニ。若。ク。ナ。シ。ト。或。時。觀。世。部。大。二。場。ヲ。櫻。田。ニ
開。キ。以。テ。伎。ヲ。演。ス。奏。木。賊。ノ。曲。ニ。及。ブ。都。下。傳。聞。シ。テ。侯。伯
士。太。夫。ヨ。リ。賈。豎。販。婦。ニ。至。ル。マ。デ。聚。觀。セ。サ。ル。ハ。ナ。シ。既。ニ

シテ次郎太夫錦袍繡袴鎌ヲ手ニシテ出ヅ折旋舞踏悉ク其節ニ中タル衆鳴采シテ已マズ呼聲沸クガ如シ曲關ル次郎太夫顧テ其徒ニ謂テ曰ク觀ル者皆服ス而シテ獨リ隅ニ笑フ者アリ汝ヲ物色シ來レト乃チ諸レヲ門ニ要シテ得タリ其人叩頭シ罪ヲ謝ス次郎太夫曰ク何ゾ罪ヲ謝スルヲ須キニヤト因テ其業ヲ問ヘバ則チ云フ陸奥ノ人ニメ木賊ヲ刈テ生ト爲ス其笑フ所以ヲ問ヘバ則チ云フ木賊叢生スル運鎌尤モ難シ一前一却便チ能ク之ヲ剪ル今君ガ爲ス所ヲ觀ル則チ却剪スルハ吾故ニ其法ヲ失スルハ笑ヒシナリト次郎太夫大ニ感悟シ即チ其儉父ヲ拜シテ師ト爲シ講習日夜ヲ累ネ盡ク其法ヲ得タリ是ニ於テ再ビ木賊ヲ刈テ奏ス其巧妙更ニ前ニ倍增ス而シテ木

賊次郎太夫ノ綽號天下ニ著ル次郎太夫終ニ千金ヲ以テ儉父ニ報スト云フ

櫻所子曰ク聞ク揚廷秀ハ博學宏文ナルモ嘗テ下吏ノ言ニ從ヒ文中ノ一字ヲ改ム吏ヲ稱シテ一字ノ師ト爲スト傳ヘテ以テ美譚ト爲ス然リト雖ヒ廷秀ハ有識ノ士ナレバ汎ク益ヲ求メテ貴賤ヲ論セザリシモ亦深ク惟ムニ足ラズ次郎太夫ノ如キ一伶人ノミ其意ヲ伎ニ用ユルノ篤キ童ニ諸伶人ノ若カガルノミナラズ儼然タル士君子ト雖ヒ次郎太夫ニ愧ル無キ者蓋シ鮮シ何トナレバ世上却剪スルノミナル者アリテ其隅ニ笑フ者一人ノミナラザルモ延テ之ヲ問ヒ問フテ之ヲ師トスル能ハガルノミナラズ憤然其笑フ者ヲ罵テ曰ク彼ハ儉父ナリ彼ハ暴書生

ナリト。翻テ巴ヲ妬ミ巴レヲ毀ル者ナリトシテ之ヲ貶斥
ス。故ニ巴レガ失錯誤謬アリト雖也。多クハ之ヲ悟ラス。偶
之ヲ知ルモ改メズ。隨テ之ガ辭ヲ作クル。吁。士君子ニシテ。
一伶人ノ平素黽勉。意ヲ伎ニ用ユルノ篤キニダモ若カズ
シテ可ナランヤ。學者須ク反省スル所アルベキナリ。

第三十一

寶生彌五郎指ヲ咋ムデ假面ニ血ヌリシ

事

寶生彌五郎ハ。散樂ヲ以テ幕府ニ仕フ。發ク善伎ヲ以テ名
アリ。而シテ道成寺ノ曲。殊ニ其得意ト爲ス。時ニ某侯酷々
散樂ヲ好ミ。嘗テ彌五郎ヲ召シテ其曲ヲ演セシム。彌五郎
乃チ女装ヲ扮シ。舞曲ヲ奏シ。烏帽繡衣。階ヲ踐ム。テ場ニ上
ル。既ニシテ。謡ヲ謡ヒ。舞ヲ舞ヒ。舞踏上。下。直々

二前ハテ鐘ニ近ツキ。躍テ懸鐘ニ入ル。鐘々ト響キ。墜リ
凡。此曲ヲ演スル者例シテ。豫メ鬼女ノ假面ヲ鐘中ニ置
キ。演舞候曲ハ。換装ニ備フ。此日彌五郎之ヲ索ムレバ。獲ス
蓋シ。諸伶輩。其技能ヲ如シ。潛力ニ度シ。以テ之ヲ窘ムルハ
ニ。彌五郎之ヲ覺トリ。切齒憤懣ス。既ニメ。謂ラク事已ニ此
ニ至ル。其狼狽奔走シテ。笑ヒヲ衆人ニ取ランヨリハ。非常
ニ。裝ヲ作シ。以テ人目ヲ驚カスニ。孰若レト。乃チ其指ヲ咋
シ。之ヲ前曲用ユル所ノ假面ニ塗ル。鮮血淋漓トシテ。鬼氣
真ニ逼ル。取テ之ヲ蒙ムリ。装成テ。鐘上ル。彌五郎乃チ起舞
曲ヲ奏ス。怒氣勃勃。毛髮悉ク張ル。加フルニ假面ハ。奇異ナ
ルヲ以テ。ス。觀ル者驚歎シ。以テ。絶技ト爲ス。曲闌テ。候其所
由ヲ問ヒ。始メテ。其儕輩ノ窘ムル所トナルヲ知リ。激賞シ

舎カス。尊養之ヲ勞ラヒ。後チ、侯其假面ヲ請ヒ、之ヲ府庫ニ藏シ、名ケテ、塗血假面トスト云フ。

櫻所子曰ク、小人ノ能ヲ妬ムハ、社會ノ通患ナリ。彌五郎ノ意ヲ伎ニ用ユルノ深キ指ヲ咋ムデ假面ニ血又リ。群小ヲシテ寒心セシム。今世ノ人士動モスレバ危キニ臨ムテ遠巡シ、一毫已レニ害無カラシテ欲スルヨリシテ、敢爲ノ氣象ニ乏シキ者、亦焉ンゾ天下ノ人ヲシテ驚歎セシムルニ足ランヤ。嗚呼、彌五郎ガ其伎ノ爲メニスルノ奮勵ナルニ殊ルヲ多シ。

第三十二 山田琳卿學業ヲ勤メ實踐ニ厚カリシ事
山田琳卿、安五郎ト稱シ。方谷ト號ス。備中ノ人。文化二年ニ生ル。家世農ヲ業トス。琳卿三四歳ニシテ能ク學業ヲ作

リ。句讀ヲ解ス。八九歳ニシテ能ク詩文ヲ屬ス。客アリ問テ曰ク、兒ガ學問ハ何事ヲカ爲サントスルゾト。琳卿聲ニ應ジテ曰ク、國ヲ治メ天下ヲ平カニス。ト客驚歎ス。成童ニシテ、恬恃ヲ失ヒ、家務ヲ治ム。暇マアレバ、則チ誦讀シテ懈ラズ。松山藩主坂倉侯之ヲ聞キ、二口糧ヲ給シテ、學資ニ充テ、尋テハ口糧ヲ賜ヒ、班中扈從ニ准ジ、藩學ノ會頭ト爲ス。時二年二十五、居シ。丁二年、京都ニ遊ブヲ請ヒ、寺島鈴木春日ノ諸儒ニ交リ、遂ニ江戸ニ至リ、佐藤一齋ニ從ヒ、佐久間象山、鹽谷宥陰等ト友タリ。相共ニ研精スル。丁凡ソ八年、其勤苦、勉勵セルヲ以テ歸ル。日ニ到リ、業大ニ進ム。祿六十石ヲ賜ハリ、學頭ト爲ス。琳卿猶ヤトシテ、教授シ、關藩ノ子弟、統テ學ニ嚮テ、而シテ、遠近ノ生徒モ亦廣集シ、家塾恆ネニ

盈ッ。又權ニレテ度支ヲ掌トリ、財政ヲ革ム。時ニ藩ノ紙幣濫出シ、價格大ニ減ス。琳卿其半ヲ火ス。乃チ價ニ復セリ。又大ニ物產ヲ殖シ、轉シテ江戸ニ鬻ギ、以テ御費ニ充ツ。是ニ於テ貯金歲入ニ倍シ、兵械ノ殘缺スル者、盡ク備具シ。士祿ノ節減スル者、皆舊ニ復ス。侯又琳卿ヲシテ郡宰ヲ兼テ民政ヲ革ム。琳卿乃チ賄賂ヲ絶チ、奢靡ヲ禁シ、郷校ヲ設ケ、貯倉ヲ置キ、道路隘キ者ハ之ヲ拓キ、川溝壅カル者ハ之ヲ疏シ、巡吏ヲ嚴ニシ、郷兵ヲ練ミ、以テ不虞ヲ戒ム。之ヲ行フコト十年、民富ミ、俗變ス。是ヨリ先キ、藩侯其家臣ノ弊風ヲ革ム。カヲ文武ニ專ラニシ、及ビ洋陣ヲ演ヒシム。軍艦ヲ購、皆琳卿ノ贊成スル所。衆論喧騰、風刺一身ニ萃マル。琳卿シテサルモ、如シ。而シテ侯益之、任セテ疑ハス。

祿百石ヲ加賜シ、參政ニ任ズ。家モ亦終ニ服ス。當時昇平日久シク、列藩奢侈遊惰ニシテ文武ノ何事タルヲ知ラズ。是ヲ以テ松山藩華政ノ名、殊ニ藉々タリ。四方ヨリ來ル風ヲ觀ル者、跡ヲ絶ズシテ、琳卿ニ就テ理財ヲ問フ者、最モ多シ。文久元年、幕府侯ヲ以テ寺社奉行ト爲ス。琳卿扈從シ、江戸ニ如ク、會、略血ヲ患ヒ、歸養ス。何クモ亡ク、侯閭老ト爲ル。琳卿ヲ召ス。琳卿疾ヲカノテ東行シ、顧問ニ備ハル。大將軍特ニ調ヲ賜フ。侯遂ニ琳卿ヲ以テ老臣ニ准ズ。是時外國覬覦シ、大藩跋扈シテ、幕政憤々タリ。積弊百出ス。琳卿侯ヲ輔ケ、大ニ釐革スル所アラント欲ス。謁ヲ春岳、明山諸侯ニ執リ、橫井桂ノ諸士ニ接シ、百方周旋ス。然レモ否運ノ復々回ス可カラザルヲ見、遂ニ疾ニ移シテ致仕ス。侯其留ム可カラ

ザルヲ知リ刀ヲ賜ハ慰勞シテ之ヲ許シ猶ホ藩政ノ議ニ
與カルヲ命ズ維新ノ後琳卿年老ユ世事ヲ厭フテ刑部山
中ニ退隱ス而シテ四方ヨリ來テ業ヲ問フ者率ホ數百人
明治十年六月年七十三ニシテ歿ス
琳卿ノ入タル豪爽ニシテ智略アリ議論多ク人ノ意表ニ
出ヅ而シテ茶邊以テ之ヲ行ヒ忠誠以テ之ヲ貫スク故ニ
人ハ不依服ス少壯ニシテ酒ヲ嗜ミ快飲劇談往々喋ニ徹シ
六七ニ遂ニ此ヲ以テ疾ヲ致ス一意攝養杯ヲ手ニ之ヲ
者二十年其性ニ克チ欲ヲ望ギ實踐ヲ篤キ大抵此ニ類ス
其博聞浹洽ナル書ニ於テ讀マザル所無シ讀ム必ズ精到
深詣獨得ノ說多ク又禪理ニ邃カシ其平生機ニ投シテ勇
進ニ理ヲ見テ決行シ物ニ執滯ヒザル者蓋シ此ノ得ルヲ

リト其詩文達意ヲ主トシ筆ヲ下セバ千言立トコロニ成
ル隨テ散逸シ復タ稿ヲ留メズ獨リ歎筆對問ノ國字稿ア
リ積ニデ將サニ身ニ等シカラントスルヲ秘シテ人ニ示
サズ嘗テ門人ニ謂テ曰ク吾藩事ヲ論ズル者多ク行ハル
天下ノ事ヲ論ズルニ至テハ則チ一モ行ハレズ他日此稿
ヲ觀テ之ヲ知ラント

櫻所子曰ク琳卿農家ニ長生シ早ク松山侯ノ知ル所トナ
リ中扈從ヨリ宰臣ト班ヲ同フスルニ至ル幕府政ヲ失シ
人心恟々タルノ日ナリト雖氏門閥世襲ノ曩時ニ在テハ
異常ノ拔擢ヲ受ケタル者ト謂フ可シ而シテ其學ヲ所ヲ
以テ松山一藩ノ財政ヲ革ム民政ヲ革ム後チ侯ヲ輔ケテ
國ヲ治メ天下ヲ平カニスルノ初志ヲ達セント試ミタル

其時、非ナルヲ知テ退隱セリ其能ク此ノ如クナルヲ致
 セシ所以ノ者、琳卿ガ性ニ克チ欲ヲ窒ギ、實踐ニ篤キ、其嗜
 ハ所ノ酒ヲ禁停シテ、二十年ニ及バルヲ以テ、學業ニ政務
 ニ堅忍勉強ニシテ、未ダ嘗テ其嗜好ヲ充タシ、言ニ敏ニシ
 テ行ヒニ鈍キガ如キ、無カリシヲ推知スベシ、後進ノ士、
 恆ニ琳卿ガ實學實踐ヲ模範トシ、性ニ克チ欲ヲ窒ギ、敢テ
 懈ル、丁無クシバ、其身ノ利達ナラザラン、丁ヲ欲スト雖、
 豈得バケンヤ、若シ性ニ克チ欲ヲ窒グ、丁能ハズ、辯論ニ巧
 ミナルモ實踐ニ迂ナラバ、則チ以テ利達ヲ求メント欲ス
 ル氏、猶ホ煙無キノ火、水無キノ氷ヲ求ムルガ如シ、省察セ
 ズンバアルベカラザルナリ。
 日本立志編卷之三終

明治十二年十一月十五日 版權免許
 全 十五年三月廿四日 再板御届

著述者

千河岸貫一

福島縣平民

東京府下芝區烏森町
志番地寄留

出板人

吉岡平助

大阪府平民

府下東區備後町四丁目
三十七番地

發兌人

前川善兵衛

全

全 東區南久寶寺町
四丁目八番地